
魔法使いの戯言

surteinn

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いの戯言

【Nコード】

N2555N

【作者名】

surteinn

【あらすじ】

魔術師、桜井悠太はいつもと同じように秘密の場所で特訓をしようとしていた。けれど、着いたその場所には一人の少女が佇んでいた。『私のこと、忘れてもらいます』 少女が放った光の弾が、俺の元居た位置に寸分の狂い無く中る。爆裂音のした場所を見るとそこには一メートル四方のクレーターが見事に出来ていた。『記憶が飛ぶどころじゃねえだろうがああああああ！』 そんな出会いから数日後、友人との買い物帰りに吸血鬼事件に巻き込まれた主人公は、雪辱を晴らすため吸血鬼を追い戦いの世界に足を踏み込

んだ。隣にいるのは草原で出会った魔術師の少女
ローテンション魔法バトル開始！

。

プロローグ

歩いていると蝉の声が聞こえてきた。

家から出て数分後、俺は人気のない荒道を歩いていた。整備が施されておらず、また怪しげな雰囲気を醸し出しているこの道は、近所の住民には行つてはならないところの一つとして知られている。もちろんのこと、ここを通る人は居ない。そんなところを何故歩いているかと言われれば、特に何も無いと言っしかない。……いやあるか。ただそれは他の人には理解できない、いやむしる頭が可笑しいと思われるくらい馬鹿げた理由だ。口外する事なんて出来ない。

奥に進むにつれて外気は都会のものから森林へと変化していった。昼間のような蒸し暑い空気を持った都会は、風鈴を彷彿とさせるような涼しい空気によって辺りを包まれていた。夏の熱気を心ゆくどころか死ぬほど味わっている俺にとってこの空気は嬉しいものがある。

そんな空気を感じながら、鬱蒼とした森の中を突き進んでいった。数分歩くと、さつきとは一変して広い空間に出た。

どこまでも続く草原

澄み切った無限に広がる星空

それに浮かぶ満月

どれもこれもが芸術的で、一度見たら忘れられない、そんな光景が目の前に広がっている。

こうして何度も訪れてしまうのは何故だろうか。いつまでも変わらず、宝石のような輝きを放っている草原。そんな不変を謳うようなそれは全てを魅了する何かを持っていた。

辺りを見渡すと、あるいつもと異なる点を一つ見つけた。

それは先客がいた、と言うことだ。

人形のような整った顔立ちに、透き通った瞳。すらっとした高い背とそれに添うように流れる黒い髪。儂げな印象を持つ少女は草原の真っ直中、瞳を閉じ静かに佇んでいた。その少女はこの風光にも劣らぬ輝きを放ちながらも、違和感なくここに溶け込んでいた。

その有り様は、俺の心を深く虜にしていた。

それはおそらく何千年、何万年経っても忘れられない光景
その美しき絵画は、確かにこの世界の時を止めていた

第一話 日常

実は俺、魔法使いなんだ。

そんな戯言を言われて信じる人はそうそう居ないだろう。そもそも魔法なんて代物がこの世に存在するかどうか分からないわけだし信じるという方が無理だ。

頭のおかしいヤツだ、と大体の人は一笑するんじゃないだろうか。それ程俺が言ってることは馬鹿げているんだ。けれど事実だから仕方がない。俺は魔法使いだ。

人目を避けて裏、暗闇で魔術を行使する者。それが俺達「魔法使い」、いや「魔術師」だ。魔法使いというのは魔術師とは比べ物にならないくらい力などが違うのだけれど。ここでは説明を省かせていただく。

さて、魔術師を自称する俺が普段何をやっているかと言われれば、別に大して他の人と変わらない生活を送っているだけだ。

さくらい ゆつた
桜井悠太。十六歳。高校一年生。

この三要素だけで説明が終わるくらい平凡な高校生。

今説明した通り、二年後に受験を控えている身であるため、毎日学校と塾と言う牢獄に囚われながらも、それなりに仲の良い友達と共に楽しく暮らしている。

何が言いたいかといえば魔術師だからといって別に大冒険するわけでも、殺し合いをするわけでもない、という事だ。だから俺は今日もいつもと変わり映えのしない一日を送る。そしてまた明日を迎える。いつまでもずっと続いていくサイクルに、何の違和感も覚えず死んでいくのだろうと、この時はそう思っていた。

午前八時十分。皆が登校してくる姿がちらちらと見えてくる頃、俺は教室へたどり着いた。一番最初に教室に入ると何故か勝ったような気分になる。知人に言えば、

「何に勝ったんだ」

とか、

「何競ってんだ」

とか、

「お前は小学生か」

とかそういった手厳しいツッコミが来るのは目に見えているから言わないけれど。

早朝とあってか、教室は閑散としており、昼間の喧騒とは全く逆の状況になっている。教室にはぼちぼち人が集まって来ているが、友人といえるヤツはどうやらまだ来ていないようだ。こういうときに何か暇つぶしになることを考え付く人には尊敬する。特に寝るか本を読むか、二つくらいしか選択肢が浮かばない俺にとっては。

さてと、このまま暇を持て余すのも勿体ないし、今日は生憎本を一冊も持ってきていない。残る手段、睡眠を採ることにしよう。昨日はあまり寝ていないから丁度いいといえばそうなのだろう。そう考え机に突っ伏し目を閉じた。その時。

「グッドおつはー！ 悠太！」

珍妙な挨拶が耳に入ってきた。

「ん？ 疲れてんのか、悠太」

「ああ、たつた今すごく疲れたよ」

顔を上げ、声の主の姿を確認する。見慣れた、やなぎだ はじめというかもう見るのを厭う程顔を合わせている友人がいた。柳田一。中学校からの腐れ縁で俺の悪友でもある数少ない親しい人の一人。イケメンとまではいかないが、カッコいいと言える顔をしており、背も175センチメートル以上と高く、外見はそこそこいい。外見はの話なので、内面がどうなのか、女子からの評判などはご想像に任せるとしよう。

「そう連れない事言つなよ。んで本当は？」

体をくねらせ、気持ち悪い動きを余裕の表情でこなす柳田に嫌悪感を抱きつつも、鞆からノートを二つ取り出し提示する。

「昨日遅くまでこれ片付けてた」

「ん？ ああ、数学と古文の宿題か。まだ出してなかったのか」「すっかり忘れてた。おかげで寝たの4時ぐらい」

柳田が同情の目をしながら手を合わせてきた。こいつに同情されると何故かむかつく。殴るか。

「今お前殴ろうとか考えなかったか？ 殺気を感じるんだけど」「ちっ」

「『ちっ』って何！？ やっぱりやろうとしてたな！」
大げさにリアクションを取る柳田。鬱陶しいことこの上ない。

「そんな顔するなよ。傷つくじゃないか。これでも結構ピュアな心の持ち主なんだぜ」

「傷どころかボロボロに欠けた心のくせによく言う」「ひどい」

柳田を軽くあしらい机に突っ伏す。うむ、バカな会話も一段落したし寝るか。ああ眠い。

「………お休み」

我が悪友は俺の気遣ってか、そんな言葉を掛けて行った。柳田に心の中で感謝しながら眠りに落ちていった。

夏の暑苦しい空気の中。体力回復のために午前中のほとんどを睡眠に費やした。

放課後、柳田たちと別れ帰路に着いた。郵便受けから新聞を取り出し、それを眺めながら家に入った。

「ただいま」

そう帰宅を告げると、奥の方からドンドンとあわただしい音と共に女の子が現れた。

「おかえり」

妹の幸音だ。セミロングの、綺麗な黒い髪を揺らしながらこちらにやってきた。

「今日はどうする？ご飯はもう用意してあるけど」

「それじゃあすぐ行く。一回部屋戻るから」

「うん。分かった」

そう言つと幸音は来たときと同じように髪を揺らしながらリビングに戻つていった。

我が家は四人家族で、共働きだ。二人とも何の職に就いているのかは知らないけれど、唯一分かる事と云つたら二時帰りの五時起床だということだけ。何だか怪しい気がしなくもないけど、それで俺たちは養われているのだし不満は言えない。まあ今まで大きなことも起きてないし不安に思うこともないだろう。

自分の部屋で私服に着替えた後、リビングに行くと美味しそうな夕食が食卓に並んでいた。

「今日は結構自信あるんだよ？」

「そりゃ楽しみだ」

時刻は六時五分。この分なら夜に向けて十分睡眠を取れるな。今日は充実した鍛錬が出来そうだ。

「ん、見事な焼き具合。腕上げたな」

「えへへ」

それまでは妹の手料理を味わつとしよう。

第一話 日常（後書き）

今回は主人公の日常のことを書いてみました。どうでしたか？
プロローグに出てきた少女は次回登場します。

文章中に何かおかしなところや、アドバイスがありましたら、ぜひ
お願いします。

第二話 草原

夕食を食べ終え、幸音に出かける事を知らせ外へと足を踏み出した。一瞬外気の暑苦しさに眩暈を感じたが、それをぐつと堪え前へ進んだ。

ふと上を見上げると星が四つか五つ宙に浮いていた。この分ならあそこにたどり着いた時には素晴らしい星空が見えるんだろうな。そう思うと自然と足が前へ前へと動いていった。

鬱葱とした茂みから抜けると、そこには美しい原野と夜空が広がっていた。草原には無駄なものは一切存在せずただ青い草だけが静かに風に揺れて立っていた。さらさらと草々が奏でる和声はどこか心を洗うような安らぎを感じさせる。

眼前に広がるは不純を取り払ったかのようなまっさらな空。その中でその存在を訴えてくる白銀の満月と小さく散りばめられた無数の星々。普段は珍しいとも感じない星空は、ここでは特別なものを感じられる。

そんな幻想的な画の中心に一人の少女が立っていた。月光で照らされ、白く輝く肌。しなやかに流れる黒い髪。漆黒のワンピース。美しい人形を思わせる姿は俺の心を深く捕らえて離さなかった。一目惚れというやつだろうか。初めて味わうどこか胸の奥が熱くなるような感覚。熱くて、くすぐったくて、でも悪くないこの感じは確かに今まで味わったことのない感覚だった。

何秒か、または何分か過ぎ、初めて少女が動きを見せた。右手を前に突き出し、左手を肘より少し前に添え、何か呟いている。その一連の動作は人形ではなく人だという事を俺に認識させた。

<集束、開始>

少女はそう俺にも聞こえるくらいはつきりとした声で唱えた。一瞬気付かれたかと思いきりとするが、そういった素振りが見えなかったし問題ないだろう。いや、別に悪いことをしているわけではないのだ。気付かれてもいい、か？

もう一度少女に意識を向ける。少女の顔は真剣そのもので、余程集中しているのか、先の言葉から変化がない。ただただじっと目を瞑っている。何をしているんだろう。そう疑問に思ったその時、唐突に大きな光の球が現れた。

「(な……!）」

本当に、あまりに唐突な出来事に自分の目を疑った。じっと光の球を観察する。自然と頭が魔術師のものへと切り替わる。

「(まさか、この子も魔術師？見た感じ集束系の魔術か)」

<集束弾 待機、同行動 再実行>

俺の思考を遮るように力強く確固たる意思を含ませるように声が発せられる。その言の葉を受け、次々と球体、いや弾丸が現れてはそこに浮かぶ。それらに確かに流れる魔力、それが彼女のものだということ事は明解だった。

ああ、俺と同じ部類の人間なのか。しかも俺よりあちらの方が数段上手だ。少し悔しいと思うと同時に嬉しくもあった。

<射角修正 制御>

弾が少女を中心として周遊する。すでに弾の数は五十を優に超えている。この系統についてはあまり知らないが、維持には相当な魔力を食うはずだ。

<全弾固定 総発射>

それらは少女の号令と共に、弾は光の矢となりあらゆる方向へ爆裂した。

一つ一つが大量の魔力を内容している光の矢はあらゆる回避のための道を塞ぐように飛んでいく。近くにいる者を串刺しにせんと遅い掛かる矢の群。その対象は俺とて例外ではなかった。

矢群が襲い掛かる短い時間、如何にしてこの状況を打開するのか、様々な考えが頭の中を駆けていく。

まず避けることは不可能。間違いなくこの身に突き刺さる。そういうふうには仕組まれている以上無理だ。なら魔術は？ それも不可能。俺の唯一の盾 青く透き通った円盾（フウンドシールド） ならばこの矢を辛うじて食い止めることが出来よう。だが、それを構成し発現するまでに必要な時間は三秒だ。明らかに遅すぎる。

その様に俺は笑う。何かあった時他の人を守ることができるよう鍛えてきたのに、いざと言う時自分すら守ることができない。その自分の不甲斐無さに嗤う。

ああ確実に死ぬな。

光の矢が頭を突き抜ける。その感触は透き通っていて、あまりにも綺麗だった。

どこまでも深い闇へと身が沈んでいく。だが少しも悔しさや悲しみといったものを全く感じなかった。

あろうことか、この身を射った少女に俺は最後まで見とれていたのだから。

第二話 草原（後書き）

長らくお待たせしました。

今回はあまり時間が無く、おかしい部分や間違っている部分が多い数あると思います。もし何か気づいた事があれば感想で報告をお願いします m (_) _ (_) m

第三話 戦闘（前書き）

1
1 / 4 / 2 3
文章追加

第三話 戦闘

「ん、やっぱり記憶とか消さなくちゃいけないのかな」

目覚めていく意識の中、最初に聞いた言葉がそれだった。

「でも、まだ忘却は完全には出来ないし、失敗したら何が起こるか」
うつすら目を開ける。

見えてきたのは先程の少女だった。そして俺は何故かその少女に膝枕をされていた。

あれ、何で俺生きてるんだろう。まだ完全に冴えていない頭を無理矢理働かせ考える。確か俺は頭を撃ち抜かれたはず。魔力が高密度に圧縮された魔弾によって。なのに何で生きている？

.....

いや、そもそもあれに殺傷能力がなかっただけなのかもしれない。なら生きているのは別段不思議でもないか。

そんな風に自問自答し終わり、少し冷静さを取り戻した俺は、少女の方を盗み見る。

「ん」

目を瞑って真剣に何か考え事をしていた。そういえばさつきから記憶がどうのこうのと言っていた気が。とりあえず放っておこう。大したことはないさそうだし。

「あ、そうだ。おもいつきり弾をぶつければ記憶なんて吹き飛ばんじゃうよね」

全くもって大したことじゃなかった。

「ちょ、ちよつと待てえ！」

「きやあ!？」

突然の殺人宣告に驚き、制止の声を掛けると同時に体を勢いよく起き上がる。

「.....」

目の前で少女は口を開けてぺたんと座り込んでいた。今何が起こ

「たか分からないといった様子をしている。

「ん？」

「え？」

違和感を感じ、じつと少女の顔を見る。うまく言葉に表せれないけれど確かにさつきまで草原に佇んでいたときと、目の前にいる少女は何処か違うものを感じる。なんとというか、雰囲気そのものが変わっている。先程は神聖ですつと遠くの高いところにいる雰囲気を持っていたが、今は年相応の（と言っても年齢は知らないけれど）空気を纏っていた。

少女は急いで立ち上がり、おずおずとしながら訊ねてきた。

「あ、あの」

「はい」

「大丈夫ですか？ 頭を思いつきり打ち付けていたようですし」

「全然、なんともないです」

「そうですか。良かった」

少女は安心した表情を見せる、そう言った。その直後にハッと何か大切なことを思い出したとばかりに勢い良く訊いてきた。

「あの、さつきのつて見ました？」

必死な形相で問いてくる少女に気圧されながらも、「さ、さつき
の光の群れ？」と確認する。

「はい。と言うことは見たんですね？」

「多分そういうことになるんじゃないかな」

少女はそれを聞くと、深呼吸をした。俺もそれに倣い深呼吸する。
なんだか落ち着いた。その代わり嫌な汗が出てくる。

嫌な予感。

片腕を上げ俺の方に手のひらを向ける。少女の周りにオーラのよ
うなものが揺らめいているのが分かった。あれ、もしかして魔力な
のか。とんでもない量だぞ。

「それでは 忘れさせて頂きます！」

目の前に魔力が一気に集まっていくのが見え、咄嗟に右に跳んで

弾を避ける。空気を薙ぐ音が聞こえた。

コンマ数秒の差で少女が放った光の弾が、俺の元居た位置に寸分の狂い無く中る。固いものを無理矢理抉るような今までに聞いたことのない重低音が耳に届いてきた。

見るとそこには一メートル四方のクレーターが見事に出来ていた。背筋が凍るのを感じる。

「記憶が飛ぶどころじゃねえだろうがああああああああ！」

むしろ首が吹っ飛ぶ。あるいは砕け散る。全く洒落にならない。

「いいんです。これくらいの方が丁度いいんです！」

「いや明らか度を超えてるだろ！」

返せ。俺の純情を返せ。今のドキドキは明らかさつきまでのものとは違う。切ない思いは死ぬ思いに変わってしまった。全く、一体どんな変化だっというんだ。

「つーか記憶消す必要はないだろっ」

「魔術を見られたら消さなきゃいけない決まりなんです！」

「頭も消し飛ばさなきゃいけないような決まりじゃなかったはずなんだけど！」

それでは恐怖の規則になってしまっ。いや、なってしまっているのか、現にこうして。

俺の言葉は届いていないのか、今も尚少女は魔弾を繰り返している。その魔弾は一向に俺に当たらず、少女は苛立ちを露わにしていた。その結果、弾は俺に当てるところか、どんどん遠ざかっていつている気がする。それ自体は嬉しいことだ。あんなもの食らったら一溜まりもないだろうし。

けれど。

俺は避けながら地面を見る。そこはもう荒地地と言っていいほど破壊されていた。土は掘り起こされ、生々としていた草は見るのを躊躇われる程酷い状況に俺はまずいなと思った。ここに通うようになってから二ヶ月、少しばかりだが思い出の詰まったこのお気に入り場所が崩壊していく様を俺は見たくはない。けれどどうすれば

いい。あの魔弾を止めるには本人を止めるか、魔弾を完全に防ぎきって相手の魔力を消費させ切るしかない。俺が障壁を出して、果たしてどれほどの数の弾幕を防ぐことが出来ようか。

「ちょこまかと　！　いい加減忘れてください！」

「自分に頭があつた事をか！？」

生きている実感ならすでに忘れたというか、どこかに置いてきてしまった。多分そこら辺を探せば見つかるだろうよ。

少女を見る。新たに弾丸　しかもさつきより大きいものを打ち出そうとしている。しつかり密度を保っているところを見れば凄いうるか、酷いというか。

ちっ、と舌打ちをする。何か方法はないのか。相手を無力させる『何か』。相手の攻撃を防ぎきる『何か』。

そこであることに気がついた。そうだ。防ぎ切らなくてもいい。

相手は一般人に魔術を見られたがためにこのような殺戮行為をするんだ。なら相手に自分が一般人ではないことを解らせればいい。

右手に魔力を籠める。自分の脳から魔術の構成を出力する。自らに、世界に働きかけるように呪文を紡いでいく。

< Load 「 Protect 」 Stand by , sta
rt >

何かが末端神経の一本一本から脊髄を通り右腕の神経を駆け抜け、右の手の平より放たれる。

硝子が割れたような儚く幻想的で現実的な音が響き渡る。すぐそばにまで迫っていた魔弾は手のひらを中心とする蒼く円い障壁に阻まれて霧散した。役目を果たしキラキラと輝きながら散っていく障壁。俺は上手く魔術が行使されたのに安堵する。そして少女は。

「早く忘れなさい！」

俺の魔術行使に気付いていないらしい。というよりも見てすらいなかったみたいだ。

「ま、待てよ！ さつき魔術を使ったの見ただろ！」

「魔術って、そんなものあるわけないです！」

「んじゃあお前が今使ってるものは何だ！」

魔術師が魔術そのものを否定するとか何事だ。そんなんで正常に行使できるものなのか？

「ほら、槍が現れたぞ。しかも青色に少し輝いている！ 不思議だろ」

障壁を捨て、槍を魔力で生成する。あまり長時間の展開は無理だが、相手を納得させるといふ目的には相応しいだろう。何も無いところから出現させたんだ。手品とか思われないうり限りこれで十分

「そうですね。不思議ですね」

「そこは魔術を使っているわああなたも魔術師だったのですねだろ！」

ではなかった。全く理解されていない。おいその少女よ。いい加減気付けよ。俺は魔術師だ。

会話により少し冷静さを取り戻してきたのか、魔弾の狙う位置が速く、そして的確になってきた。一定方向へ逃がし、態勢を崩すように周りを打ち抜き、回避できない箇所へ止めの一撃を打ち放つ。例え回避されても相手の体力を奪う事が出来るため、決して無駄な行為とはならない。この集束率と技術。並大抵の鍛錬では実現は不可能だろう。ここまで精密な射撃だともう混乱なんてしていないのではないかと疑ってしまう。焦った状態でこんな技を繰り返せないだろうし。手に持った槍で幾つかの集束弾を弾こうとするが、たった一つに中っただけで霧散してしまった。かなり強度があるな。込められる魔力量は相当な量だ。身体に魔力を通し軽く身体強化するもはや体力勝負、長期戦を覚悟したほうがいい。気合を入れ次の襲撃に備えようと構えた。

が、その次がなかなかやって来ない。不審に思い少女を見ると、片腕を上げた状態で、会話前と同じように茫然と立ち尽くしていた。

「え、あれ……？ もしかして、魔術師さん？」

ようやく気付いてくれたみたいだ。

戦闘開始から早二分弱。なんとか少女の魔弾から逃れることが出来たのだった。

第三話 戦闘（後書き）

数週間ぶりの投稿。

三日間の定期テスト。

テスト明けの休みをフルに使っての執筆。

帰ってきた答案たち。

親の生暖かい目線。

親の一言「次はもつと頑張りなさい」

私は死地から帰ってきた。

ということ、またしばらくは執筆に専念出来そうです。

あとがきとか感想文とか苦手なので、ここらで。

それではまた次話で。

第四話 謝罪

「本当にすみませんでした！」

少女は頭を何度も下げ謝っていた。

こちらの思惑が当たり、うまく俺が魔術師であることを認めさせた後、本当に申し訳ないことをしてしまったと、ずっとこんな調子で謝られ続けていた。頭を下げるたびに長い髪が前に来て、なんだか貞子みたいな感じになっている。後ろから月明かりで照らされているのもあつてか、かなり怖い。目が必死なのも原因の一つだ。

「頭を上げて。全然怒ってないから。怪我也全くしてないし」

俺はそう何度も言っているが、なかなか止めようとしてない。

「いえ。でも」

それでも謝罪をしようとする少女に、はあと溜息を吐く。真面目というか頑固というか。

まあしょうがない。俺は軽く手を握りコンと少女の頭を突いた。

「あた」

「人の話を聞けよ。俺が良いって言うてるんだからいいじゃねえか。それにそんな謝られても逆にこっちが済まない気持ちになつてくる」

俺が悪いことをしたみたいじゃないか。

「さっきの事で罰ほしいなら今ので十分だろ。さっさと髪を直してしゃきつとしろ」

「あ……はい。ありがとうございます」

またペコンと少女は頭を下げた。今のは謝罪ではなくて感謝の意味だろうし、いいか。

顔を上げた少女の顔にはさっきまで陰鬱さは微塵も含まれておらず、晴れ晴れとした表情は彼女によく似合っていた。

「あ、名乗るのを忘れてました。初めまして。風流美月ふうりゅうめづきといいます。高校一年生です」

「あ、どうも。俺は桜井悠太。俺も高一なんだ」

いきなり自己紹介をされ思わず驚いたが、こちらも名乗り返した。こういう事はあまりしたことがない分なんだか照れくさい。慣れていない所為か顔がほんのりと熱いのはごく自然なことだろう。

「同い年ですね。私藤咲高校に通ってるんです」

「俺も同じところ通ってる」

「そうなんですか？ うわあ！ 奇遇ですね！もしかしたら廊下とかですれ違ってるかもしれませんね」

風流は目を輝かせながら話していた。へえ。そうだったんだ。これだけの美人で廊下ですれ違ったら振り向かずにはいられない、そんな美少女が同じ学校にいたことに俺は純粹に驚いた。

「あの、桜井さんはどうしてここへ？」

取留めもないことを考えているとそんな疑問をぶつけられた。

「俺か？ いつも通り魔術の練習をしに来ただけ」

「へえ。桜井さんはいつもここでやってるんですか」

「そうだな。ここは周りに障害物もないし、誰にも見られない。

それにこの光景が結構気に入ってるな。と、それより座らない？

このまま立ち話っていうのもなんだし」

その場に倒れ込むように座ると、風流もそれに倣うようにして座った。

「あとお互い『さん』付けは止めようぜ。同い年なのに変だろ」

「それもそうですね。分かりました。それでは悠太君」

「なんだ美月」

早速お互いを呼んでみた。……うん。思ったより恥ずかしくない。いきなり馴れ馴れしすぎているかもしれないと不安に思っただけで、相手も気にしていないしいいか。

「悠太君って、初対面の人にもこんな風に話せるんですか？ 私引っ込み思案だからうまく喋れなくて」

「いやそんな事ないんじゃないか？ 十分喋れてるぞ。それに俺は初対面だったら固まって今みたいに話せない」

「それじゃあどうして私とは普通に喋れるんです？」

「この場と風流の雰囲気だな」

「あ、ありがとうございます」

実際は襲撃されたとき敬語を使うとか考える時間がなかったし、そのままなりゆきで敬語を使わずに気軽に話そうとなったただけだ。ただ、これを言うとまた落ち込ませてしまつかもしれないから言うのを止めた。

「……………」

「……………」

話題がなくなり話が途絶える。お互い初対面と言うこともあつてか未だきこちなさが抜けきっていないのもあるかもしれない。

そうだな。ここは

「なあ。さつきやってた魔術。あれってどんな時に使おうと思ってるんだ？」

「さっきのというと散弾のあれですよ。あれは法外者に使用する威嚇、捕獲のための魔術です」

「あれを人に向けて？」

「え」と。そうです、ね。人と言っても相手は魔術師ですし、あれくらいなら打ち落とされるか、打ち消されるでしょう。そういう意味では『威嚇』用ですね」

「と、いうことは。美月は魔術師相手に戦闘をすることがある、またはしているのか」

「はい。それに最近は特に通り魔が現れるようになりましたから通り魔。通りすがりに人に危害を加える法外者。そういえば新聞の見出しにそんな言葉が並んでいたな。

「ここ最近巷を騒がせているあれか。その口ぶりからすると、その犯人は魔術師だつてことか」

美月は首を縦に振りそれが正しいことを示した。

同じ神秘を行使する者の中にもこういうバカをするヤツはいるのか。そう思うと自分の中から嫌悪感のようなものが湧き出てくるの

を実感した。全く、気味が悪いことこの上ない。そんな事をしてま
で手に入れたいものって何だよ。

「マスコミも『吸血鬼の再来』なんて大仰なタイトルを掲げて。
事はそんな軽々しいものじゃないのに」

そこで初めて美月は苦々しい顔を見せた。どうしたのか訊こうと
いう考えが浮かんだが、すぐに打ち消した。そのかわり当たり障り
のないよう返答する。

「向こうも仕事でやってるんだし仕方がないんじゃないか？ そ
うしないと自分も家族も養えないし」

「そうなのかも、しれませんがね。けれど、それで傷ついたり大切
な人を亡くした人々がいるってことを知って貰いたいです」

美月はそれを言うと立ち上がって遠くを見る。丁度隠れて表情を
見ることは出来ないが恐らく………。

「ねえ、悠太君」

「何だ？」

「お願いがあるんだけど」

「お願い？」

「そう。お願い」

美月は黒く絹のような髪をなびかせ振り向く。

「私のグループに入ってくれないかな」

凜とした綺麗な声でそう訊いた。

第四話 謝罪（後書き）

そろそろ本題に入ってきました。長かったです。ここにいくまでに二ヶ月。ノートに書いて、パソコンに打ち込んで、手直しして。書いてる途中で何度泣きかけた事か。ああ、登場人物のキャラが変わっていく。安定してない。泣きたい。

とそんなこんなで、今回は早めに投稿することが出来ました。今まで投稿したのも少し修正したので、前より読みやすくなっていると思います（読みにくかったらすみません）。

それではまた。

第五話 勧誘

「グループ」

「はい。『星の隠れ家』っていう名前がこの辺の自治を担当している魔術団体なんですけど。最近吸血鬼騒動で忙しくて手が回らないんです。だから、その、手伝ってくれたら嬉しいなって、思って目を輝かせそう言う美月は、それにと後を続ける。

「うちは結構いろんな資料とかもあるし、魔術の研究とかに便利だし。メンバーはみんな優しいし。悠太君もすぐに馴染めると思いますが」

幸せそうに、楽しそうに、美月はそのグループのことを話す。聞いているとそこがどれほど温かい場所か、どれほど素晴らしい場所か伝わってくる。俺も、そこに行ってみたい。そこで自分らしさ、自分の魔術を手に入れたい。

けれど。

だからこそ。

「遠慮する」

俺なんかが入ってはいけない。そんな気がした。俺が入る余地なんてどこにもない。きっと、どこにも。

「え、遠慮って」

「会ったばかりなのにそんな世話になるわけにはいかないしな」
そう答えると、美月は落胆した様子を見せる。少しきつく言ってしまったのかもしれないけど、そう言わなければ。

「でも、吸血鬼に関しては俺も少し協力する。この草原に行くまでの道辺りでいいなら見回るよ」

「あ、はい、ありがとございます。それじゃあ私からも。もし悠太君がグループに入りたい、力になって欲しい、そう思ったときはいつでも来てください。これがグループの場所だから」

どうぞと美月は財布から名刺を取り出し渡す。そこには風流美月

の文字とグループの名前、その住所が書かれていた。俺はポケットに仕舞う。

「ありがとう。いざと言う時は頼ることにする」

「ええ、どんと頼ってください！」

大きく胸を張り明るく返した美月は晴れ晴れとしていて、とても彼女に似合っていた。

「と、もうこんな時間か」

その後、俺がここに来た理由を思い出した美月はコーチに名乗り出て、攻性魔術、主に集束系の魔術を中心に教えてくれた。俺が失神してた時間はそれほど長くなかったらしく、一応の練習時間はあった。元々一時間ここにいる予定だったし、三十分も出来れば充分だった。美月の実際に魔術を行使しながらの説明は、とても正確かつ分りやすく、数十分前とは比べ物にならないくらい集束が上手くなった。

最後に一通りお祝いし全ての成功を見届けると、美月はこちらにグツと親指をつき立てる。

「うん、うん。前より断然よくなってる。魔力の集束率も維持も正確さも各段に上がってる！」

「あ、ありがとう」

自分の事のように喜ばれ面映くなる。今きつと顔が真っ赤に染まってるんだらうと思うと、より一層赤くなるのを感じた。

「私、説明とか人に何か教えるの苦手だから上手くできるか自信なかったし、実際何回か噛んじゃったけど。でも役に立てて嬉しいです」

「役に立つどころじゃなかったぞ。集束って名前だけしか知らなかったし、勿論使うなんてこともなかったからな。けど今じゃこうして撃てるようになった」

俺は手の平に魔力を溜め、それを光エネルギーに変換し撃ち飛ばす。作り出された一つの弾は真っ直ぐにどこまでも伸びていった。

「でも、何でそんな自信無さ気なんだよ。すごく分かりやすかったぞ。お前の説明。ぜひとも俺の家庭教師になってほしいぜ」

「そ、そうかなあ」

美月は頬を掻き照れたように笑う。その何気ない仕草に何故か胸の鼓動が早くなる。やっぱり意識せずにはいられなかった。おい、おかしいぞ俺。何急に意識しだしてるんだ。正常に戻れ。混乱しているだけだ。そう自分に言い聞かせはするけど、自然と美月の方に視線が行く。

「ばああああ、と晴れ晴れとした表情を浮かべ、完全に自分の世界に入っていた。

「……よし」

美月をみて冷静さを取り戻した俺はもう一度時刻を確認する。ギリギリの時間であることを再認すると、美月に別れを言う。

「もう夜遅くなるし俺はここで帰るよ。これを機に集束の魔術を練習していくよ。それじゃ」

少し大きめの声で別れを告げる。功を奏したのか美月はこちらの言葉に気づいたようだ。先程のほんわかとした表情は既に消えていた。

「もう帰るんですか？ ってそっか。家の人に迷惑掛けられないですしね」 「ああ。また会った時は宜しくな」

手を振って見送ってくれる美月にこちらも振り返す。一層ぶんぶん手を振る美月に苦笑しながら俺は夜道を歩いていった。

元来た道を通り抜けながら今日出会った少女 美月のことを考えていた。あの神秘的な光景はいまだに目蓋の裏に焼きついている。その中心に佇んでいた美月と、一緒に話をした美月。同じ少女とは思えなかったけど、どちらも美しく、可愛くて、そして惹かれてしまう。

「ははっ。なんかもうアレだな」

自分の心情について笑いが零れる。この一時間ちょっとですっかり

変わってしまった自分の心。頭の中があの子女のことと埋め尽くされていく。けれど、これはこれで悪くはないか。

時計の針は九時半を指している。幸音にお叱りを受けることは覚悟しておこう。

第六話 襲撃

吸血鬼。

ルーマニアのワラキア地方に実在したヴラド大公をモデルにして生まれたという邪鬼。黒いマントを羽織、闇を疾駆する男性。さらさらとした金髪をなびかせる、自由奔放な猫のように、明るくしなやかな女性。現在では様々な姿形で伝えられているが、そのどれもがある共通の特徴を持っている。

それは『血を吸う』ということだ。吸血鬼の最も知られている特徴としてまず最初に挙げられるだろう。

相手の血を糧として生き、奪われた者は多くの場合同族と化す。陽を嫌い、闇に生きる。これはそういう類だ。

今日噂こんにちになつている吸血鬼と呼ばれるモノもそれに属する。被害者が夜道に一人二人でいるところを襲い、死ぬか死なないかのギリギリの線まで血を奪い去る。いや、実際死者が出ていることを見ると、その線を優に越えている違いはない。目的は依然不明。そもそも目的があるかどうかも分からずにいる。

そんな怪奇が街を闊歩している。女子供だけでなく男性でさえ街に出るのを拒んでおり、外へ出るのは最低限必要なときのみだ。(それでも街を出歩く阿呆はいるのは事実だが。)

「このところ街は眠りにつくのが早い。それも至極当然のことだろう。」

「つまりは、この藤咲高校に在籍しているけど通ってはいないってことだ」

「はい？ それはどういう事ですか？」

「どういう事も何もそういう事だ。桜井」

我がクラスの国語担当教師、ふしおか てるみつ藤岡照光は机の上にある資料を片付けながらそう答えた。

美月と出会ってから二日後、俺は藤岡におる質問をするべく職員室に足を運んでいた。美月についてだ。美月の口からここに通っていると聞き、休み時間、放課後を使って捜してみた。ところが二日経っても全く見かけることがなく、どうにもおかしいな、入れ違うにも程があるだろうと思いきや直接先生に訊くことにしたわけだけれど、なんかよく分からない答えが返ってきた。

「わかりやすく言えば、ゴールデンウィーク明けから学校には一回も来てないって事だ。何でも家の事情でしばらく来られないらしい。それくらい察しろ」

出来るかよ。あと最初からそう言え。心の中で密かに悪態をつく。苛立ち始めた俺だったが、理性で何とか殴りたい衝動を抑え込むと、平常心を保ちながら再び藤岡に向き直した。

「ふふんふふー」

机の上にあつた資料を片付け終え藤岡は、椅子にもたれ掛かり一仕事を終えた感じの清々しい表情を見せていた。鼻歌まで歌ってやる。そして何故そこに仕舞ったのかは分からないが、引き出しから缶コーヒーを取り出しプルタブを開けた。カシツといういい音が藤岡の手元から鳴る。おい見てみるよ。ごくごくと幸せそうな顔で飲んでやがるぜ。はっはっは、コンチクショウ。

俺は手首を回し準備運動をしながら今得た情報を整理し始める。それにしてもゴールデンウィーク明けから、か。となると一ヶ月しかこの学校に来ていないし、中間試験、学期末試験も受けていないという事になるな。なら今日来ているってことはまず無さそうだし、会うこと自体偶然が重ならない限り無理だってことか。……それってまずくないか？ 出席日数も足りなくなるだろうし。出席したとしても授業についていけるのか？

「全く、初めて生徒が頼ってくれたっていうのに、その内容が人捜しとはなあ。というかお前ってそんなキャラだったか？」

思考を巡らしていると藤岡はそんなよく分からないことを言った。
「はい？ キャラって何ですか、キャラって」

突然ぶつ飛んだ事をいう教師の顔をまじまじと見る。いつからそこまで阿呆になった。

「いや、桜井は女子に興味あつたんだなと」

「え、まあ、男子ですからね。興味ぐらいは持ちますよ」

「ほお。ということは何？ その子狙ってるの？ 結構美人だった記憶があるし。お前って案外ハイエナ？」

「……」

ああ。なるほど。あんたの言いたいことがよく分かった。要するに……。

「あ、俺に紹介してくれない？ 知り合いなのか？ だったら是非とも」

ぶん殴ってほしいって事だな。

「いい加減黙れ。このボケ教師」

ニタニタと馬鹿げた発言をする藤岡の顔面に拳をお見舞いし、形だけの礼を済まし職員室を後にした。次同じような事を言ったら、骨ごと砕き散らせてやる。

この後もう一度職員室に行く羽目になったのはまた別の話だ。

「よっ、遅かったな。用事はもう済んだのか？」

校門を通り過ぎた辺りに柳田が壁にもたれかかるようにして立っていた。俺は普段一人で帰宅することが多く（一人の方が気楽だからな）、誰かと一緒に帰るのは稀である。今日は特にこれといった用事もなく、約束もしていないはずだから、てっきり先に行ったと思っていた。

「ああ、面倒なことがあって。ていうか帰らないで待っていてくれたのか？ なんていうかごめん」

「別に気にしなくていいよ。それよりさっさと済ませようぜ」

「？ 何を」

用事ならさつき済ませてきたと言ったはずだけれど。なんか他に
あつたか？

俺の発言に柳田は、『ただいまあなたの言った言葉に耳を疑って
います。あなたは何と仰いましたか？』とでも言いたげな顔をして
いた。凄い顔だ。

「お前絶対忘れてるだろ」

「だから何を」

「ブレイブソード？」

「……ああ！」

やつと思い出したかとやれやれと柳田は肩をすくめた。そうだ。
すっかり忘れていた。そういえばそんな約束をしたな。

ブレイブソード？。PS2専用ソフトで、無印版から絶大な人気
を誇り、どの作品も発売から四ヶ月はランキングトップを飾るRP
Gゲームの第四弾だ。このゲームの特徴はなめらかなグラフィック、
多種多様な技と魔法（技は武器での攻撃方法のことで、魔法は含ま
れない）、膨大なまでのステージとシナリオ、そしてよく練り込ま
れた詳細でしつかりとした軸を持つ設定。その完成度に初めてプレ
イしたものは涙を流さずにはいられないだろう。実際俺は泣いた。

そして今回発売されるブレイブソード？は従来のシステムに加え、
新たなシステムが導入されるのだ。この作品のファンの一人として
絶対に逃すわけにはいかない。同じくこのゲームに魅せられた柳田
とともに買いに行く予定だったのを思い出す。

「悪い、すっかり忘れてた」

「別にいいからさつきと行こうぜ。俺たちはちゃんと予約してる
んだから買えないってことはないしょ」

「そうだったな。それじゃあ早いところ行くか」

今思えば学生服着ているから何か言われそうだけど、この御時世
そんなことで補導されることはないか。

鞆を背負い直し、まだ見ぬ世界へと思考を飛翔させ、目的の店へ
と向かった。

夜八時。お目当ての品を手に入れ意気揚々としながら俺たちは夜の街道を歩いていった。街灯に照らされながら辺りを何となく見渡す。人がいない。

あの噂の効果は意外にも大きいらしく普段見かける不良らしき人々は一切見あたらない。それも仕方が無いのだろうけど。

「それにしても妙に静かだな、桜井さんや。俺は今とてつもなく不安なんですけど。手、繋いでくれね？」

「そのまま捻りきってやるよ」

「やだやだやだやだ。ごめんなさいごめんなさい」

何故男同士で手を繋がなきゃいけないのだ。気持ち悪い。けれど、確かに不安ではある。

この道にある店の多くはすでに仕舞われていて、営業しているのは精々四、五件くらいだ。すっかり錆び付いていて、聞こえてくるのは俺たちの足音と風が吹く音だけだ。

無言の中、二人で暗い路地を歩く。

ここ周辺を照らしていた街灯は、進むにつれて徐々に暗くなっていくような錯覚を覚える。いつしか全てが闇に包まれたこの世になる。一歩歩く度に心臓が高鳴っていく。一歩歩くことに不安が増していく。

ここから先へは行ってはいけない。

ここから戻ってももう遅い。

ここから動かなければやられてしまう。

頭の中をそんな文が駆け巡る。頭痛がする。頭に、本能に、身体に訴えてくる。たまらず走りだそうとしたその時。

「……っ！」

空気が変わる。暑い身を焦がすような夏の外気はどこか不安定な妖しく冷たい空気に入れ替わった。ぞくりと嫌な寒気が襲ってくる。

前方から何かがやってくるのが目に見えた。

「おい、誰かこつちに来てないか？」

隣にいる柳田が震えた声でそう言った。恐らくこのどうしようもない不安で不吉なモノを感じているんだろう。少なくとも俺はそれを感じていた。

やがて暗闇から一つの影が姿を現した。

黒いコートを羽織、赤い目を赫奕とさせこちらを見つめる、二メートルはある巨体の男。その目から感じる眼光と身体からにじみ出るように発せられる殺気は、今この場の全てを支配していた。

動けない。

動かせられない。

手足は恐怖で雁字搦めに絡まれ、首から頭部は男を見たまま、目を逸らすことも出来ずにいる。唯一自由なのは思考することだけ。今俺の心と身体は明らかに乖離していた。

男は一步一步こちらに向かってくる。残りわずか五メートル弱。あまりに絶望的な状況に俺は思考までも奪われかねなかった。

嗚呼、間違い無く殺。

「あ、が、あ、あ」

不気味な声が耳に届く。

声の主は柳田だった。

男が柳田の首に何か細い管のようなものを突き刺している。何をしているか分からないけれど、それが命に関わるものだというのを感じられた。

柳田の顔がこちらに向く。顔は蒼白で、良くないものに乗移られているみたいで。そんな中で唯一変わらない瞳からは『助けて』という懇願のメッセージが伝わってきた。その伝言は俺の瞳を通して脳に伝わり、体全体に広がっていく。

「っ　そいつから手を離せ！」

何かしなければならぬ。そう思った瞬間、氷のように固まっていた体が氷解した。拳を強く握りその男に向かって殴りかかる。

風を切る音が聞こえた。

拳が空を切る。視界の端で男が呼吸をするように避けるのが見えた。重心が前に行き、そのまま体勢を崩して倒れ込むのが安易に予想できた。顔が地面と接触する直前、男と目が合った。

「……？」

何故か、その男の目には悲しみが宿っていて、それがこの常識外れな状況とは不釣り合いで。

それは深く印象的だった。

地面に体が叩き付けられる。衝撃で肺から酸素が一気に外へ流れ出た。酸素の貯蓄が大きく減り息が苦しくなる。地面に手を着いて胸を強く押さえ、呼吸を整えようと努める。それは大きな隙だった。そこを男が見逃すはずもなかった。

上から俺の頭を大きなゴツゴツとした手で押さえつけると、男は俺の首に何かを刺した。

血が徐々に抜き取られていくのが直に伝わってくる。恐怖や焦燥感、そしてこのまま死んでしまうのかという疑問。それらが頭の中をグルグルと駆け巡る。

抵抗が出来なかった。またしても鎖で全身を縛られたように動けずにいた。

意識が遠退いていく。

俺はまだ死にたくない。

そんな言葉を意識が途絶える前に言った。それを男がクツクツと嘲笑した。

「安心しろ、少年。貴様の血は我々の叡智の糧となる。お前は犠牲者という下位な存在ではなく、起源へ導いた者として上位の存在になれたのだ。歡喜せよ少年。貴様は高貴なる弱者だ」

桜井悠太の意識があったのはそこまでだった。

第六話 襲撃（後書き）

やっと投稿できた……。

長らくお待たせして済みませんでした。とりあえず吸血鬼さんを登場させることに成功。あとは主人公を事件に完全に関わらせるくらいですね。

それではまた会いましょう。

第七話 起床

白い光が視野に飛び込んできた。

「 眩しい。一番最初に感じたのはそれだった。」

止める、もう少し寝かしてくれ。今はとても疲れてるんだ。

懇願するように俺はきつく目を瞑る。それでも容赦なく飛び込んでくる白光は、目蓋の一本一本の血管がくつきりと見えるほど強く俺に起きろ、目を覚ませと理不尽に命令をしてくる。その命令はどつやら拒むことを許さないらしい。視神経から通った情報は脳に伝達され、眠気が流れるように消えていくのが感じられる。

分かった。起きればいいんだろ？

「 少しやけくそ気味に勢いよく布団を剥いだ。」

霧が晴れるように視界が広がっていく。

そこには見覚えのある空間が広がっていた。周りを見渡すと、清潔さを形にしたとばかりに真っ白い空間があり、そこにあるベッドの内の一つに俺は横たわっているのに気がついた。

「 何故だろうとしばらく思考し、納得する。……ああそうだった。」

確か俺はあの男に殺されかけて、気を失ったんだ。きつと誰かが俺たちを見つけて救急車でも呼んでくれたんだろ。死んで天国に来たわけではない事を祈るか。

体の節々を動かし問題が無いか確かめる。打ち身や擦り傷などがあって多少動きづらいいけれど、特に支障はなさそうだ。ひとまず病室を出て、医者が看護婦に目覚めたことを知らせようと、何か履き物を履こうと下を見た。

「 ……はい？」

何故か。

そこには、何故か寝袋に入ってすやすやと眠る風流美月の姿があ

った。

思考が一瞬間停止する。

何故だ。

どういう事だ。

一体何が起きているんだ。

普通に暮らしていて体験することはないだろう有り得ない状況に頭が混乱する。本当にどうということ？ 少しの間でも現実逃避をしようとして一旦布団をかぶり直し、三十秒数えてからもう一度下を見る。「すー、すー」

予想通り全く同じ光景が眼前に広がっていた。先と変わらず安らかな顔で気持ちよさそうにすやすや寝ている。

「ってか、おい起きろ」

さすがにこのままにしておけないし、この寝袋少女を起こすか。

もう一度履く物がないかベッドの周りを探して見たけれど、履く物どころか埃さえ見当たらない。仕方なく裸足でベッドから降り、美月を揺らす。

「おーい。起きろー」

「ん、ん〜」

少し煩わしそうに身じろぎしただけで全く起きる気配はない。もう少し強く揺する。

「んっ、ん〜。あと、五分」

「ベタな反応だな。起きろ。目覚めろ」

「あと十分」

「増えてるし」

「あと五光年」

「それは距離だ」

しかも結構な距離あるし。

「ボケてないで早く」

「すー、すー」

そうこうしているうちにまた眠り込んでしまった。さてどうしよう

う。

この女の子が病院の床で寝袋に入って寝ているシュールな光景。それをパジャマ姿でじっと見る少年。誰か通った人に勘違いされそ
うだ。

「本格的に起こさないとな」

どれだけ揺すっても駄目だったし、生半可のことのことでは通じ
ないだろう。しばし考え俺はある方法を思いつく。うむ、これな
ら確実に眼を覚ますだろうな。

「恨むならば自分の眠りの深さを恨め」

寝袋の端をしっかりと掴み、

「せいっ！」

思いつきり転がしてやった。ごろごろと凄まじい勢いで転がって
いく美月。ちなみに俺が寝ていたベッドは入り口に最も近い場所に
位置しており、美月が寝ていたのは廊下側。そしてドアとベッドの
間に障害物は存在しておらず。

「うううううううういっだっ！」

美月は壮大な音と共にドアにぶち当たった。

「うー、うー、うー」

美月は糞虫状態でのた打ち回った後、脱皮するようにして寝袋か
ら這い出てきた。一種のホラーシーン。

「あいたたた」

寝ぼけ眼を擦りながら起き上がり、美月は周りを見渡していた。
キョロキョロと首を動かす様はリスにどことなく似ていた。笑いを
堪えようと口を塞ぐ。面白い。

美月は俺に気付き驚いた様子だったが、事情を察したのか不愉快
そうにこちらを見る。

「何笑っているんですか」

足を曲げべたりと座り込み、ジト目で睨んでくる。それに対し俺
は出来る限り爽やかな顔で挨拶した。

「あ、おはよう。起きた？」

「そりゃごろごろ床の上を転がされた拳句ドアにぶつかりましたから。しばらく痛みに耐えなくてはならないほどに」

絶賛不機嫌中だった。というか寝起きなのに頭の回りが速いな。とりあえず。

「申し訳ございませんでした」

「別にいいです。そもそもこんな所で寝ていたのが悪かったですし」

「いえ、僕が全て悪かったです」

「気にしないで下さい。けれど、次回同じようなことがあったら優しく起こしてください」

同じようなことが起きないで欲しい。こんな特殊な場面にもう二度と出くわさないことを願うか。

「それに桜井さんに用事があってここに来たんですから」

美月は立ち上がり服のしわを伸ばしながら言った。

「はあ、俺に」

ということは恐らく………吸血鬼についてだろうな。実際に被害にあった人物に話を聞こうってところか。

「大体予想ついているみたいですね。それではちょっと場所を変えませんか？ 少し混んだ話なので」

「分かった。んじゃ行こう」

美月が寝袋をベッドの下に仕舞った、いや隠したのを確認すると一緒に部屋の外を出た。

第七話 起床（後書き）

年内に投稿することが出来た・・・！！
上旬に公開する予定だったのに、結果はこれ。
もっと精進せねば。

第八話 説明

「以上が私がここに来た理由です」

俺は病室から歩いて二分弱のところにある公共スペースで美月から一通り話を聞くことになった。ここにあるのはベンチ三台と自販機二台、点点とある観葉植物のみ。そんな少々寂しい場所は普段から人の通りもないのだろう。話している間一人も来なかった。

さて、美月の話を要約するところだ。

丁度二日前、俺と柳田が襲われた日、美月が所属するグループ『星の隠れ家』は吸血鬼対策としてペアでここら一体の見回りをしていたらしい。夜徘徊していると突然小規模だが魔力を感じ、すぐその場に駆けつけた。そこにいたのは地面に倒れこんでいる二人の少年。ただちにグループのトップ 神楽月姫かぐらつきひめに報告、パートナーが救急車を呼んだという事だった。

本来は美月が関わるのはそこまですたはずだったが、その被害者の中に知人がいるとなればまた別の話。気になった美月は神楽月に『被害者の一人が知り合いで、しかも魔術師だから何かしらの情報を得ているかもしれない』と言い、俺への事情聴取をやらせて貰えるように説得、許可を得た後俺の病室へ直行したのだそう。そして今に至る。

「なるほど。にしてもよくそんな理由で通ったな」

「はい。これでも四、五年グループにいますから。古株なんですよ私」

これまでの実績が評価されているから、ということだろう。少々頼りない気もしなくはないが、真面目そうだし信頼されていることに違いない。

「でも、理由はこれだけではないんです」

美月は座りなおして、ふうと息を吐くと眼を閉じた。その動作だけで、きつと重要なことを話すのだろうと直ぐ察知できた。俺にと

って良いものか悪いものかは判らないが。

「悠太くん」

透き通った星空のような瞳がこちらを見る。じっと見つめていると吸い込まれてしまいそうで、何だか照れくさくなった俺は少し眼を逸らす。

「なんだ」

「実は今日、頼みごとがあつて来たんです」

「頼み、ごと」

私がそう言うと、桜井は少し難しそうな顔をした。何か妙な事に巻き込まれそうだなとでも言いたげだ。けれど伝えなければいけない。

私は桜井の目をしっかりと見て、

「私の、私達のグループに入って貰えませんか」と伝えた。

大体予想していたのか、特に反応せず、ただに額に組んだ指を当て考え込んでいた。

「それはグループとしてのお前の頼みか？ それとも風流美月としての？」

数十秒の後、桜井は私に確認するかのように訊いて来た。私はこの問いへの返事に悩み、戸惑う。純粋な戦力として、街を護るために必要としているのか。それとも今までの桜井を見た上で、ただ純粹に桜井に来て欲しい、仲間になってほしいのか。きっとそう訊いているのだと思う。私は前者の可能性を頭から消した。吸血鬼の捜索、退治に協力してもらおう事はあるけれども、ただ戦力としてしか見ないというのは無い。なら後者の方なのか？

桜井のことを整理する。まずは魔術師として腕。あの草原での事を鑑みるに、基礎や地盤は尋常じゃないくらいしっかりとしている。教えたことに対しての吸収力も、身体能力も申し分ない。

それに、私は自分の胸に手を当て、草原で話していたときと先の病室でのことを思い起こす。自分は確かに桜井と話しをするだけで、

桜井がそばにいただけで言い様のない安心感を感じていた。心がほんのりと温まる。何故かはよく解らないけど、多分彼と同じような空気を桜井は持っているからなんだと思う。だからこんなにも懐かしく、温かい気持ちになるのだろう。ぜひ来て欲しい。私達の仲間になって欲しい。一緒の時を過ごしたい。いつの間にか桜井はこちらを見ている。返事は既に決まっていた。あとはそれを伝えるだけ。「私はあなたに仲間になってほしい。……風流美月として」

まるで告白するみたいなお恥ずかしさと緊張感が自然と生まれていた。心臓の鼓動が大きくなっていくのを感じながら桜井の返事を待つ。出来ればいい返事が聞けたらいいなと思いつつながら。

「分かった。俺はグループに入る。これから宜しくな」

桜井は十秒と経たないうちにそう返してくれた。その言葉に喜びや期待、安堵を感じる。私はあまりの嬉しさに思わず桜井の手を掴んでぶんぶん勢い良く振る。

「これから宜しくね、悠太君！」

突然のことに桜井は目を丸くしていたけれど、すぐに柔和な笑みを浮かべる。少し照れたようなその笑みを、私は心のアルバムにそっと仕舞いこんだ。

考えている間、俺はあの日の場面を呼び覚ましていた。

体に悪寒が走るのを感じる。それでも、冷静に正確な判断をするために俺は無理やり心の扉を抉じ開けた。

「っ」

その場を支配する狂気。

外界から雪崩れてくる押しつぶされそうな不安と恐怖。

何もかも黒に包まれた吸血鬼と呼ばれる男。

不吉と言つ言葉をそのまま形に表したような異空間とその存在は、思い出しただけでも足が竦んでしまう。

そして何よりも印象に残っている血を吸う瞬間に、吸血鬼と呼ば

れる所以と恐れられる理由を俺の脳に直接叩きつけられた。それと共にあれは相手にしてはいけないものの類だと知らしめられた。

俺はまたアイツと対峙しなければならぬ。その度胸、確固たる理由を俺は持つているのか。

『あ、が、あ、あ』

不意に呼び起こされた友人の苦悶の声。友人が果てようとする姿を目の当たりにしているにもかかわらず、俺は恐怖で身体が動かず、すぐに助けに行く事ができなかった。自分の身を守るように、あわよくば近くに居る誰かを助けられるように。その信念の下で培った魔術は全く歯が立たなかった。俺の力が及ばなかった。もう二度と同じことが起きないように、また目の前の人を傷付かないように、俺がすべきことは何か。

もつと強くなる。現状恐らく俺に出来ることはこれだけだろう。でも、どうしたらいい？ 個人の鍛錬では恐らく今が限度。これからは他の人との模擬戦やより多くの知識が必要不可欠となるだろう。当然そうだった組織や団体に属することを要する。しかしこれまで独りで行動してきたこともあってか、魔術師の世界での常識をあまり知らない俺は、今からそうだったものに入るのを躊躇っていた。俺自身上手くやっていける自信がなかった。これからも一人でやっていくしかないだろうと、そう思っていた。

けれど、

『私の、私達のグループに入って貰えませんか』

美月のあの言葉。それが俺の不安を吹き飛ばした。直感する。きっと美月がいるなら上手くやっていける。何の根拠も無いけど、そう言い切れる自信があった。けれど、一つだけ訊いておきたい事があった。意味が無いと言われてもおかしくない、けれどどうしても確かめたいこと。

『グループ』としての美月の頼みか、それとも『風流美月』としての美月なのか？

自分はどういう意味で必要とされているのか。例え如何なる返事

をされたとしても俺は入ると答える。だが、今後 単純に戦力としてこの身を投じるのか。あるいは美月たちの仲間、グループのメンバーとして戦地に共に赴くのか。それを美月の言葉で判断しようと思う。前者なら唯ひたすらに鍛錬を、後者なら仲間としてグループの一端を担いたい。

「それはグループとしてのお前の頼みか？ それとも風流美月としての？」

俺は少し恐れながら、けれど何処か期待しながら、訊いた。

第八話 説明（後書き）

やっと、やっと書きおわった。

読み直してみるとアレですね。桜井のグループに入るくだりがなかなかおかしいですね。なんか力量不足という事実を叩きつけられた気がします。orz

いろいろな人の作品読んでると尚更それを感じますね。

どうしてこんな面白いネタ浮かぶんだろうとか。

なんでこんな素晴らしいストーリーが浮かぶんだろうとか。

やっぱり執筆と読書するしかないんでしょうか。

第九話 訪問

翌日、退院手続きなどを終わらせ病院の外へと出た俺は、美月に連れられある所へ向かっていた。古めかしく、年季の感じられるビルが立ち並ぶ中を颯爽と進んでいくと、真新しい建物前に立ち止まった。

「ここが私達のグループ『星の隠れ家』の本拠地です」

美月はシャキーンという効果音が聞こえそうなポーズで決めて言った。BGMとしてファンファーレが鳴り響いてきそうだった。

俺は本拠地の全体を眺める。よく目を凝らしても汚れ一つ見えない純白の壁に、几帳面にも均等に左右対称にある窓と入り口。コンクリートや何処からどう見ても現代建築の産物だった。グループの本拠地って言うくらいだから、古びた如何にも怪しげな館を期待していたのになあと少し残念に思う。と言っても自分の家も同じ現代建築だから文句言えないのだが。

「さあ行きますよ。もう連絡を入れてありますから早くしないといけません」

ぼんやり考えていると、美月にいきなり手をぐいつと引つ張られ俺は、咄嗟には反応できずつんのめりそうになる。

「うおっと！ ちょっと待って」

何とか体勢を立て直しつつ制止の声をかけたが、そんなものは構わないとばかりに進んで行かれた。俺は溜め息を吐き、美月に半ば引きずられる形で付いていった。

「失礼します。桜井悠太を連れて来ました」

「どうぞ。もうすでに準備は済んでいる」

所長 神楽月が部屋で待っている部屋へやって来た俺達は、返事を確認した後緊張した面持ちで入っていった。

「いらっしやい。君が桜井君だね。ささ、そんなところに立って

いないで」

中には一人の女性がソファで礼儀良く座っていた。黒髪のショートカットと黒いスーツ、きりつとした顔は大企業の女社長をイメージさせる。何より印象的なのは彼女の紫色の瞳だった。その瞳で見つめられると、思考が吸い取られていきそうな感覚に襲われる。神楽月の言う通り近くのソファに腰掛け姿勢を正した。

「では改めて。初めまして、私は神楽月姫かくらつきひめ、こここの所長をやっている者だ」

「えと、初めまして。桜井悠太です」

「うん、知ってる」

「.....」

よく解らないが藤岡照光と同じようなものを感じたが、気のせいだと思い直す。神楽月さんもアイツと同じだなんて言われたくないだろうしな。

「それで、今は高校生、かな？」

「はい。藤咲高校に通っています」

神楽月は、ほお、と目を丸くして、それでは美月と同じ高校だねと微笑みながら言った。

「ええ。先日そう聞いた時に僕自身驚きました」

これだけ可愛くて綺麗な娘こなのに何故噂にもならなかったのだろうと疑問に思っていたけれど、それは先日解明された。

「たまにしか学校に行ってくれないからね。君からも美月を説得してくれないか？ 仕事に熱心なのは嬉しいけれど、学問を蔑ろにする気があるからね」

思案顔でそう俺に提案する。なるほど。藤岡が言っていたことは真実だったか。これまでの美月の言動からは全くそんな雰囲気を感じられなかったから、もしかしてアイツ嘘言いやがったか、なんて疑ってしまったじゃないか。

「すみませんが、その話は後にして貰えませんか。時間が余りないですし」

すっかり置いてけぼりを食ったあげく、自分のことを相談された美月はむすつとしながら先を促す。

「そうだね。それではこの件は後で存分に話し合うことにしよう」

「！」

「はい。それでは後ほど」

「!？」

あっさりそれに同意する俺。美月が顔を真っ赤にして何か反論しようとして口を開く。

「さて、君の事についてだが」

それをこれまたさらりと美月を無視して、真顔で次に進めた。この人面白い。

「君は美月の薦めでこのグループに入りたいと考えたらしいが、本当にそう思っているのか？ 確かに入ってくれれば色々と助かるのだけれど」

先程とは打って変わって真剣な雰囲気はこちらをじっと見据える神楽月。どうやらお話しタイムは終わりらしい。ここからは面談になるのかな？ 俺は気を引き締め、真意を探るような眼で見つめてくる神楽月へ決意を伝えるように答える。

「はい」

「……それは何故だ？ 他の者ならこんなややこしい事に巻き込まれないように身を引くだろうし、二度と関わりたくないと思えるだろう。けれど君はそうしない。ここに入るといふ事はヤツとまた出会う事になる。最悪、もしかしたらやられるかもしれない」

「それは、入って欲しくない、って事ですか？」

「いや、そうではない。唯、半端な覚悟で来られても私達が迷惑するといふ事だ」

よく今一度考えて欲しいと神楽月は催促する。思考時間は要らない。もう昨日の時点で考えはまとまっている。ここからが肝心だ。賭けの真似事、ここで失敗するわけにはいかない。

「自分自身のためです」

「自分自身のため？」

「はい。今回の事で自分の身にもこういった災いが降り掛かるのだと実感しました。吸血鬼については噂で聞いていましたが、それに目を向けるどころか、そんなものが存在するわけがないと思っていました」

そんなわけがないのに。自身が魔術師であるというのに、何故否定していたのか、と俺は自身を嘲笑する。

「いや、それも仕方のない事だったんじゃないか？ 一般人が聞いたら興味を持つか聞き流すだろう」

「でも、実際は存在しました」

「……」

「正直言うと怖かったです。襲われた時体が氷みたいに固まって、只やられるだけだった。しかも、またやられる可能性が残っている。それなら。安全がある程度保障されていて、尚且つ自分自身の魔術を強化できる機会が前より多くなるかもしれない『グループ』に入る事がメリットがあるんじゃないか。そう考えたんです」
勿論吸血鬼と会う可能性も大きいというデメリットもあるが、それよりもグループに入ることです得られるメリットが遥かに大きいだろう。

神楽月はふむと頷き、しばし思考する。その後。

「つまり、私達のグループを利用しよう。そう考えているわけだな」

冷たい声で訊ねてきた。俺はどう返答するか一瞬迷ったが、自分の考えをはっきりと伝える為に肯定した。

「悪く言えばそうなるかもしれませんが」

俺の言葉に、隣に座っていた美月が凍りつくのを感じる。明らかに何らかの琴線に触れた。恐らく怖い顔か悲しげな顔でこちらを見ている。俺は美月の顔を見るのが怖くて、神楽月に考えを伝えるのに集中することにした。

「なるほど、な。それで『自分自身のため』なんて言ったのか」
神楽月は思案顔でじつと目を瞑る。俺はその様子を見ながらも、内心焦っていた。正直言つて俺は今結構危ない橋を渡っている。俺の発言は明らかに相手の印象を悪くするものだ。決していい印象など与えられるわけがない。かと言つて発言を撤回するわけにも行かない。果たして神楽月がこれを了承した上で受け入れてくれるかどうか。

「一度だけ訊く。本当に自分自身のためか？」

「はい。二言はありません」

しつかりと力強く返事をする。

しばらくの沈黙。神楽月は組んだ指の上に額を寄せ、そのままじつとしていく。数秒の後顔を上げた。それは先程までの冷たいものではなく、温かく微笑みを湛えるものだった。

「君は、優しいんだね」

「え？」

予想外の言葉に俺は耳を疑う。それも当然。今までの俺の発言からは何処にも優しさを感じられるような節が見当たらなかったからだ。そんな俺の驚きを他所に、神楽月は云う。

「桜井悠太。君を『星の隠れ家』のメンバーに迎え入れる。明日から仕事に勤しんでくれ」

美月と出会ってから六日目、俺はメンバー入りが決定した。

第九話 訪問（後書き）

入団のくだりがグダグダ&無理やり過ぎるorz
いつか書き直そう。

もし文中で何か気付いたことがあれば、
感想まで宜しく願いますm（）（）m

第十話 紹介

所長から許可を貰い晴れて正所員となった俺は、所属している部『搜索部』の人達に挨拶をするため、美月の案内の下長い通路をひたすら歩いていった。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

着くまでの間、ずっと沈黙が続いていた。何回か離し掛けてみたものの、不機嫌そうにしながら無視され続けられていた。

やっぱり言わなかったほうが良かったのか？俺はその場で頭を抱え込みたくなる程後悔した。そりゃ怒るだろう。自分の家同然だと言っほどの場所を俺は利用すると告げたのだから。こうして案内して貰えるのが奇跡に近い。

「着いたよ」

気がつくとも目的の場所に着いていた。木製の両開きの扉があり、左上のプレートには「特別会議室」と銘を打たれていた。美月は失礼しますと神楽月の下を訪れた時と同様、声を掛け扉を開ける。

中へ入るとそこは、イメージしていた真っ白い机が並べられた封鎖的な空間ではなく、木独特の色合いで彩られた温かさに包まれた空間だった。所長室以外見た事がないので断定できないが、恐らくこの部屋が一番趣向を凝らした一室であろう。正に重要な会議を開くのを用途に作られた、「特別会議室」の名に恥じない一室だった。部屋の中心には大きな円卓が置かれており、その周りの椅子に俺の同僚となるだろう人達が座っていた。全員がこちらを一斉に見る。怖い。

「こちらが明日から『搜索部』で共に働くことになった桜井悠太君です。それでは自己紹介をどうぞ」

投げやり気味に紹介され多少凹んだが、落ち込んではいられない。すぐに気を取り直して所長のとくと同様と言った。自己紹介を言い

終え、頭を下げると同時にがたりと椅子が動く音が聞こえた。そして立て続けにこちらへ足音が近づく。前を向くと一人の少女がこちらへ歩んできているところだった。茶色の長い髪を二つにまとめ、所謂ツインテールの形に結われ、前髪はバツテン型のヘアピンで留められている。焦げ茶色と白を基調とした服は少女を柔らかいながらもしつかりとした雰囲気醸す。目の前に来ると少女は顔を覗き込むようにしてじつと観察してきた。照れ臭さを感じ顔を逸らそうとしたが、その前に先に彼女の方が離れたため、する必要はなくなつた。

「へえ、あなたが新人の。初めまして、私は木下優姫きのした ゆうき。これから宜しく」

優姫と名乗つた少女は手を差し出し握手を求める。それに応えしつかりと握つた。

「次は私から」

またもや誰かが立ち上がりこちらにやってくる。ウェーブの掛かつた黄色寄りの茶色いロングヘアを弾ませながら来た女性は、全体的にほんわかとした人で優しいお姉さんみたいな人だ。今まで会つたことのないタイプの女性だった。

「こんにちは。初めまして結城美里ゆづき みさとです。ぜひ美里みさとって呼んでね。年上だからって遠慮しないで、気兼ねなく話して下さい」

「はい、宜しく願います。ゆ……美里さん」

「良くできました」

にこりと笑う美里は合わせた手を顎につける。相当嬉しそうだなんというか、この人に憎しみとか悲しみとかは無縁そうだな。

「あと、そこで腕組んで座っている寡黙な人はロナルド・アーヴイングアーヴって名前よ。愛称はロンだから」

この部屋で最後に名を知つた寡黙な人は椅子に座ってじつとしていた。混じりけのない白髪に、しつかりとした顎の骨格、深く刻まれた額の皺。全身から静かなオーラを感じる男性は、他のメンバーとは違う何かを持っていた。美里の紹介の声と俺からの視線に気づ

いたのかこちらに顔を向けると、こくと重々しく頷く。

「あともう一人メンバーがいるけど、後日改めて紹介するわ。ついでに私のことは優姫って呼んでくれて構わないわ。私もあんたの事を悠太って呼ぶから」

「了解しました」

優姫に美里さんにロンさん。一人一人を見て俺は美月の言う通り優しそうな人たちだと思った、居心地が良かった。自分がどうしてここに来たのかという理由を忘れるほどに。

「それでは、改めて宜しく願います」

これからこのメンバーでやっていく。そのことだけで気持ちは自然と明るくなっていった。

夜八時。悠太が帰宅するのを確認すると美月は所長室へと足を運んでいた。何でも伝えておきたい事があるらしいのだ。一体どのような内容なのか。思考はその一点に絞られていた。頭に浮かんでくるのは一人の男の子。思い出すだけで胸がもやもやとしてくるのは何故か。理由は分かっている。あの発言が原因だ、間違いない。それが私をこれ以上なく怒らせ、そして心中の底に今も尚深く沈んでいる。悠太と初めて会った時、その顔、話し方、雰囲気のことなく彼に似通っていて直感的に信頼できると思ったのだ。それだけではない。私は悠太にほんの少し興味を持った。喋っているだけで心がほんのり温かくなる感覚。それは彼と一緒に居た時に感じた事にそっくりだった。それから間もなく、悠太がグループに入ってくると言った時はとてつもなく嬉しかったし、今でも思い出すと胸が弾む。だからかもしれない。気持ちが生かっていたから、あの答えに大きな衝撃を受けたのだと思う。

『つまり、ウチのグループを利用しよう』

『悪く言えばそうなるかもしれませんが』

唇を強く噛む。やめて。あんな事を言っただけで欲しくなかった、聞きたくなかった。彼との思い出が残るこの場所、彼が愛していただろ

うこの場所を、道具みたいに言わないで！

ふと気がつくところ所長室の前にとくに着いていた。いけない、危うく通り過ぎるところだった。先程までの思考を消し去るように深呼吸をする。大丈夫、いつもの私に戻っている。

ノックをしてから、失礼しますと断りを入れドアを開けた。

「いらつしやい。待ってたよ」

そこには相変わらずの格好と姿勢でいる神楽月の姿があった。

「急に呼び出してしまつて済まないな。少し話しておきたい事があつてね」

「いえ、全然構いません。それで話というのは」

「桜井君について」

一瞬、その名を聞いて固まつてしまった。何せさつきまでその少年の事に思考を巡らせていたからだ。私の反応を見逃すわけがなく、やはりかみたいな顔をされた。微笑ましいとでも言いたげな眼をしながら。

「もしかしたら面接の彼の発言で君が腹を立てているのではないか、と思つてね。案の定、一日中不機嫌そうだったらしいね。優姫から聞いたよ」

「別に不機嫌なんかじゃ……」

ない、と断言出来なかった。確かについさつきまでその事に怒り、悩んでいたのだから。

「それにしても何で入団を許可したんですか。いくら所長でもあんなこと言われたら」

「今回はね、これを使つたんだよ」

言われたら不快に思うはずと言い終わる前に神楽月が自分の眼を指さしながら言った。

「あ、魔眼……」

「そう。久しぶりに『サトリ』を使つて心を読んでみたんだ。今回彼が体験した出来事はとても貴重だったし、幾分か高い魔術素質を秘めていた。だから是非とも我がグループに入つて活躍して貰い

たい、そう考えてね。けれど、もし吸血鬼に対して目を合わせただけでショック死するくらいの恐怖心がある、または逆に軽んじている部分があれば断ろうと思ってたのよね」

「そういう心配は、無かった？」

「むしろ頼もしいくらいだな。いや、別にそこまで不思議そうな顔をしなくてもいいんじゃないか。彼が恐いやら利用するやら言っているとき何を考えていたか分かるかい？」

「いえ、全く」

悠太の考えなんて分かりたくもない。そう思っていたことをふと思い出した。一体彼が何を考え、ああ言ったのか。魔眼を通して所長は何を知ったのか。彼の本心、それを聞いてみたい。

「……彼は友人のことを考えていたんだよ」

「ゆう、じん？」

「自分が不甲斐ない所為で、未熟だった所為であんな目に遭わせてしまったのだと深く後悔し、これまでよりずっと強くなって誰かを助けられるようになりたいと思ったんだよ、彼は。だからここに入りたいと要望したらしい」

「っ、なら何であんな事を言ったのですか？ 最初からそう言えば、私は」

「桜井はそれを言わなかった。私にはよく分からない思考だが、それが格好つけや偽善に聞こえてしまうのではないかという懸念を抱いていたらしい。そう聞こえてしまうくらいなら、あくまで自分を護るためだけなのだと言えば理屈も通るだろうし自分の目的も達成できるだろうと。彼なりにグループに入ることを一生懸命考えていてくれたのだね」

かなり嬉しい気持ちだ、と神楽月は笑う。私は先程までの自分の考えに恥を感じると共に、彼がそういう人物であったことに安堵を覚えた。

「私自身、彼にはこれからもここに居続けて欲しいし、吸血鬼事件以外の仕事も任せたいと考えている。君に彼のパートナーになっ

て貰いたいのだが、どうする」

君が彼と行動を共に出来るか。そう言外に問われ、しばし黙考する。

数秒の後、私は、

「分かりました。この件を引き受けます。明日以降その役割、懸命にこなしていきます」
と返答した。

第十話 紹介（後書き）

やっとの更新。

模試？ 散々だったさ。

試験？ これから幕を開けるさ。

第二次世界大戦について？ 覚えきれるか。

お待たせしました。二月の最後。ぎりぎりで投稿です。

遅れて済みませんでした；

どうも紹介シーンとか交渉が苦手で、ずいぶん苦戦してどうしようか迷っている内に月末に……。

多分今月中にもう一話更新できると思いますので。
それではノシ

第十一話 憂鬱

「はあ」

そんな不安と困惑を吐き出すように溜め息をついた。

天候は曇り。空一面に広がる灰色とは裏腹に真夏の地上は蒸し殺されるのではないかと思わせる程の熱気を含んでいた。そのためか目の前の視界はゆらゆらと揺らめく感覚に支配され、強い眩暈を感じる。不快指数を容赦なく上げていく外気を身に受けながら、ただただコンクリートで舗装された固い道の上を歩き続けた。そうしながらこの後、いやこれから美月に対しどう接すればいいのか延々と悩み続けた。

どう声を掛ければいいのか。

どう仲直りすればいいのか。

それ以前にどう顔を合わせればいいのか。

何分経つてもこの疑問は解消されず悶々と悩む、焦りが込み上げてくる。

まずい。これから同じ仕事場で働いていくというのに、初っ端から険悪とかどうなんだ。やはり何事も無く平和且つ楽しく過ごしていきたいと思うのは誰もが願うことではなかるうか。俺自身それが一番だと考えている。

「……………仕方がない。今更発言を取り消すこともできないしな」

取り消す気も更々無いが。それでも好きな人を傷つける発言をしてしまったことに少なからず負い目を感じる。時の流れに任せるしかないのだろうか。

そうしている内に本部が見える辺りにまで来てしまった。あと数分経たずに着いてしまうだろう。こうなったら後は何も深く考えずに行った方が返っていいかもしれない。

結局何もいい案が浮かばぬまま、白色のビルへと向かった。

「おい、その桜井」

ビルまでほんの四、五メートルの地点。門前には一人の少年が佇んでいた。茶髪のツンツン髪をくしゃくしゃ掻きながら、明らか殺意を含んだ声でそう言った。変なのが現れたぞ。

「お前、風流を泣かせたらしいじゃねえか青二才」
初対面なのに酷い言われようだ。

「お前と風流が言葉を交わしただけで処刑だったのに、その上悲しませやがって……」
「覚悟は出来てるんだろうな」

「待てよ。発言が何もかもおかしくないか!？」

「知るか」

流された。

「何処の誰かは知らねえが」

「さつき自分で桜井って言ったばかりだろ」

「俺を怒らせたこと後悔させてやらあ!」

理不尽の塊みたいな少年は何処から取り出したのか、鉄鎚 無骨な、破壊そのものを形にしたような鉄の塊を手に握っていた。

それを認めたと同時に俺は大きく後ろへステップした。ビル街に響き渡る地面を抉る低い破壊の音。元自分が居た場所を見ると半径一メートル強の見事な円いクレーターが出来上がっていた。

もはやおぞましいともいえる域にまで達する既視感に眩暈を感じる。相手がこちらを殺す勢いで来ている所まで何もかもが似ていた。違いといえば場所と性別と、あとは解決方法が一切見当たらないことぐらいだろう。死ぬな。

少年は地面から鉄鎚を引っこ抜き、体勢を立て直すと、次は外さないとはかりに魔力を体中に巡らし襲い掛かるうとする。なるほど、やっぱり彼も魔術師だったのか。どこか納得しつつ魔力を手元に集束させ、呪文を唱える。

「<Load Star Light> Star」

手から生み出された白き球は掌の上でふわふわと浮く。直径五セ

ンチくらいの球は集束弾としてはかなり小さな部類に入るものだ。攻撃という面からしてみれば恐らく最低な魔術。

「そんなもの出してどうする！」

それを見て少年は、俺がまともに集束もできない初心者だと推測したのだろう。少年はにやりと笑うと球ごと俺を潰そうと鎚で横に薙ぎ飛ばしに来る。俺の身体まで残り二メートル弱、そこで。

「なっ!？」

全てを包み込むかのように、球が白く燦燦と輝いた。

相手の目を眩ます、ただそれだけに特化した補助魔術。これは美月に教えてもらった魔術の一つ『スターライト』。この術の利点は目晦ましのみならず、術者の視界を奪わない、つまり俺自身に全く影響は出ないのだ。多用するわけでもないが、会得しておけば案外役に立つと言っていたのを思い出す。ああ、その通りだ。ありがとう、助かった。

あまりの光の強さに少年は反射的に顔を背け鎚の横への力を殺しながら半円を描き、止まった。

すぐさま敵を打ち砕こうと動き出すが。

「いない？」

先程まで、正確には光の奔流が始まるその瞬間までいた筈の桜井とやらが辺りを見渡してもその姿を認めることは出来なかった。

逃したか。

ちっ、と舌打ちをした後少年は自分のアジトへと戻っていった。

第十一話 憂鬱（後書き）

11日。3日間の定期試験終了。

PC使って小説を読む。

地震発生。寮から出ることに。

12日。実家に戻る。

そうして今日。投稿する。

人生で一番忙しい四日間だった。

今回は短い話でした。

次回が少し長めになるの、かな？

どこで区切るかなかなか悩みますよね。

丁度いい長さで書き終わればいいのですが、これまた難しく。

話は変わって。

これ以降美月さんの性格・キャラが多少変わります。

それに伴い前投稿したものも多少修正していく予定です。

修正と言っても口調を変えたり、誤字や矛盾をなくす程度なので、読み直しをする、という事態にはならないのでご安心(?)下さい。

何か矛盾している点、誤字脱字、こうした方がいいんじゃない？

というアドバイスなどあれば宜しくお願いしますm()m

それではまた次回。

第十二話 疲労

「ゼーはー、ゼーはー」

「えーと。悠太？ 初日だからって、そんな全力疾走してまで十分前に来ようとしなくてもいいのよ？」

「いや、命の、危機に、さらされた、から」

あの死地から命がけで退避し、ここまで持てる力を出し切って来た俺はテーブルに突っ伏し、必死に脳と肺に酸素を送り込もうとしていた。つい最近習得した魔術を急速きんそくに使用したのもあってか心臓の戻りが遅い。明日から走り込みでも始めるか。

「はあ、命の危機、ね。それはご苦労様でした。ポカリいる？」

優姫からポカリをありがたく受け取り、ゴクゴクとCMで流れそうな音を鳴らしながら一気に飲む。水分が身体に染み込んでいくのが直に伝わる。全て飲み干しふうと一息つく。

「助かった。本当にありがとう」

「礼なんていいわよ。息切れ切れで倒れている人を放っておけないし」

前髪をくるくる弄り優姫は素っ気無く返す。頬をほんのり赤くしているのを見て、何だか可愛らしく思えた。

「それにしても遅いなあ。二人とも何かあったのかしら」

お茶を飲んで一服していた美里が心配そうに呟く。いつもは美月は既にこの時間には来ているのだと推測できた。と、それよりも。

「二人？」

「あれ、言わなかった？ 昨日一人来ていないって言ったわよね。その一人が今日出席する予定なの」

「そうなのか」

「そんなに身構えなくても平気よ。私たちと同じ年だし、それに馬鹿で無鉄砲だけどいい奴だから」

優姫は微笑えみ、そう教えてくれた。そうか。いい奴なのか。恐

らくさっきの理不尽君（仮）よりはいいんだろうな。

「すみません。遅れました！」

扉が勢い良く開く音と共に、元気のある少年の声が聞こえそちらの方へ顔を向ける。

「あ」

「ん？」

そこには。

「お前は……」

さっきの理不尽ハンマー野郎（仮）がいた。

「「何でここにいるんだよ！」」

「あれ？ 二人とも対面済みなのかな？」

美里がお茶を啜りながら意外そうな声を上げる。

「へえ、そうだったんだ」

「対面というか、対戦済みだ」

「は？」

は？と言われても。まさか「どんな仲？」と訊かれたら「殺し合う仲」と答えなければいけない関係のやつとまた会う事になるとは思っても見なかった。殺し合う？ いや、違う。一方的だったよな、あれ。

「さあて、さっきの続きをしようぜ。今回はこそこそ逃げる事も出来ねえだろ？」

またもや鉄鎚を取り出し、俺の全てを打ち砕いてやらんとばかりの殺気を纏う少年。数分前より倍以上の殺気だ。

「死にさらせ」

そして、どこぞのツンデレ少女並みのオーバーキル発言と共に、その鉄鎚を振り下ろす。

「<集束弾 発射>」

せずに少年の頭に白い光線が中った。

何一つ言葉も無く少年はその場に崩れ落ちた。その際に宙に在った鉄鎚が物理法則に則って落下、彼の背骨に当たり鈍い音が部屋に

響いた。美里さんが驚きのあまり目を丸くして、この惨劇の被害者を凝視していた。ロンは腕を組み、ひたすら瞑想している。心なしか、微笑ましい光景だと笑っているように見えるのは気のせいだろうか。優姫は目頭を押さえて、言わんこっちゃないと溜め息を吐いていた。

「ごめんね、悠太君。宗一君が迷惑かけて」

声のした方、扉の前へ向くと、掌を前に翳かざしている美月の姿があった。前髪が丁度いいくらいに目元を隠し、表情があまり見えず多少恐怖を感じる。

「そこに死ん……倒れているのが神谷宗一」

優姫が冷蔵庫から氷嚢を持ち出し、神谷と呼ばれた少年の背骨に当てていた。意外と優しいんだな。死亡者リスト入りし掛けている人をそんなもので治せるのか疑問が残るが、この際気にしないことにする。

「一応、覚えておいてね。メンバーなんだ。こんなのも」

「了解」

とりあえず熱血で美月一直線の理不尽ハンマー野郎というのは理解した。それにしても本当にいつもこんな調子なのだろうか。

「いつもこんな感じよ」

やっぱり。美月の神谷に対する扱いがぞんざいな理由に、この事が挙げられるだろう。

「悠太君」

「はい。何でしょうか美月さん」

姿勢を正し、若干震える手足を必死に押しとどめながら顔と顔を合わせる。

「何で敬語……？ まあいいか。もし宗一君が何か言ったり、してきたら、迷わず私に呼んで。すぐに駆けつけるから」

「イエッサー！」

「だから何で敬語。しかもサーは男性の敬称だし」

例え宗一とやらに刃を向けられようが、殺されかけようが、美月

を呼ばないようにしよう。無駄な血を流させたくない。

「さて。みんな集まったところで本日の会議を始めましょう
今日もやること沢山あるわよ」

今まで起きた悲劇というか惨劇をまるで無かったかのように美里は振舞い、それぞれ席に着くように促す。

全員が定位置に着き所長が来るまで自分達だけで解決出来るものはなるべくこの場で片付けることになった。所長なしで会議が進められる事に多少違和感を感じたが、見た限り、ここではよくあるみたいだ。俺の席は入り口から見て右側の奥から四番目、美月の隣の席だ。

「昨日はごめんなさい。今日からまた宜しくね」

着席するため、俺の傍を通るとき、すれ違い様に美月はそう小さな声で言った。驚き、見ると少し顔を合わせづらいような、でも照れくさそうな曖昧な表情をしていた。それに頷いて返すと、彼女はほっとした笑みを浮かべる。まだ小さな溝があるように感じたけれど、少しずつ埋めていけばいいか。

会議が始まった後、所長が顔を出し、メンバー全員が揃った。所長が宗一を無視したのは言うまでもなく、仕事初日はメンバー一人をいないものとして過ぎて行った。話し合い中、未だに床にぶっ倒れている宗一を視界に入れないようにしながら美月たちの談義に入っていくのはかなり大変だった。

「これから上手くやっていけるのかな」

そんな不安を抱いたグループの初日であった。

「はあ、はあ、はあ、疲れ、た」

「お疲れ様。初日だったから辛かっただろうけど、慣れれば大したこと無くなるから」

慣れれば、って。それまでに多分一ヶ月は掛ける事になるぞ。正直慣れたくない。慣れたら人間離れしてそうだし。

俺は闘技場、模擬戦や戦闘用の魔術の試行などを行う場所、その床に荒く呼吸を繰り返して、ぶっ倒れていた。今日はよく倒れるな。自他共に。

「心配しなくてもいいわよ。これじゃあ物足りないくらいにまで鍛えてあげるから」

肩を回しながら優姫は体中に寒気が走るほどの戦慄させる台詞を吐いた。

「し、死んじゃう」

「それじゃあ死なない程度にしておくわ」

その言葉は崩れかけていた俺の精神を崩壊させた。

泣きそうな顔を見て、優姫はくすりと笑い闘技場を出た。

「はい、どうぞ」

変わらず床に転がっていると、優姫とほぼ入れ違いに美月が入ってきた。彼女の手にはプラスチックの入れ物が握られていた。どうやら水を持って来てくれたらしい。ありがとうと言い、それを受け取り、飲み干す。なんか既視感^{デジャヴ}。まだ身体は酸素を欲していたが幾分か心身ともに軽くなる。

「ありがとう」

「どういたしまして。今はゆっくり休んでね」

美月はにこりと笑むと、用はこれだけだとその場から立ち去ろうとする。

「あ、待って」

「？ どうしたの」

呼び止めたはいいいものも、何を言おうか。頭が真っ白になる。早く、何か言わないと。そう思った俺は「また明日」という言葉が口をついて出た。

「………また明日」

美月はそう返すと闘技場を後にした。背を向ける時に見えた彼女の横顔は何故か精霊を思わせた。

第十三話 巡回

午前九時過ぎ、俺たちは神楽月の命令で、第四区、丁度住宅と繁華街の境辺りを範囲とした区域で見回っていた。神楽月がいうには、もうそろそろヤツが動き出すらしい。より一層集中して巡回しなければいけない。

陽が落ち、辺りは人工的な光でほのかに照らされている。無機質で何の温かみも感じられない街灯から発せられる光に、一種の安心感を得ることができるとも、恐らく街が闇に染め上がる夜だけだろう。普段気にも留めない様な事に目が行ってしまうのはきつとアレの所為だ。

ほら、あのスーパーの袋を手に提げているおばさんから、煙草を吹かしながらのん気に歩いているおっさんから、道のど真ん中で近所迷惑になるくらい大きな笑い声を上げている学生の集団から、全ての道行く人から温かみを感じる。すっかり人氣が無くなってしまった街ではこの人数、およそ七人くらいでもかなりの大多数だ。温かい、安心する、気が楽だ。これ程他の人がいること自体に感謝するなんて今までに無かった。

「ちょっと。さっきから何ぶつぶつ言ってるの？ 怖いよ、怪しいよ」

その声にハッと意識を戻し隣を見る。呆れた様な、変なものでも見てるかのような憐憫の目を以ってこちらをじつと見ていた。どうやらいつの間にか考えていることを声に出していたらしい。ふむ、確かに痛いな。これでは変な目で見られても仕方が無いか。

「温かいやら安心するとか気が楽とか。聞かされている身にもなつてよ。私だからまだしも、他の子だったら凄く冷めきつた目で見るとよ」

「気をつける」

なるほどと実感する。そうか。今美月から発せられる極寒のオー

ラも他の子よりはマシなのだろうと。

俺の返事にうんと満足げに頷くと、美月は足を速める。

あれから一週間、学校が終わると同時にほぼグループへと直行していた。理由は言うまでもない。内容は主に魔術の鍛錬とこの周辺の魔術関連の事柄について。前者は美月と優姫による魔術構成の訓練、そして神谷による木刀や魔術を使用した実戦、そういった練習をこなしている。後者は周辺の魔術に関する土地、霊脈や在住のこつち方面の方々の住所、そして戦闘を行いやすい場所を事細かに教えてくれる。他にもこのビルの中に収められている高度な魔術礼装、機械オートマドール、自動人形、魔力石についてなども。解説は神楽月、所長自ら説明してくれた。今このグループにある設備は今までの功績によつて手に入れたのだそうだ。

そんなこんなで魔術に関して技術や知識、共に格段に上がった俺はほんの少し遅しくなつて、逆にほんの少し臆病になつた。自分がどれくらいの実力を持っているのか明確に分かつてきたからだろう。これまで比較する対象もなく、ただひたすら独学に近い状態でやって来たのだから仕様がないかもしれない。けれど、今は指摘してくれる仲間がいる。ライバルとも言えるヤツがいる。そして明確な目標がある。目標、吸血鬼の背中を追い越すこと。例えヤツのような化物が現れても守れるように、一人でも傍にいる人を守り通せるように、俺は強くなる。絶対に。

「悠太君。もう少し速く歩かないと。十時半までに全部回れないよ」

「分かった。今すぐ行く」

とりあえず。それまでは誰かと助け合つて、手を差し伸べあつて行こう。

しばらく言葉を交わしながら歩いていると、もう最後の一角に差し掛かっていた。これで今日も終わりか。ふうと息を吐き、上を仰ぎ見る。これまた変哲も無い、灰色に塗りたくられた空が広がって

いて、不安でも悲しみでもなく無表情というものをそのまま描いたかのようだ。見ているこっちが悲しくなるような表情を浮かべている。呆と眺めていると背中をぼんと叩かれた。

「ぼーっとしてないですよ。まだ終わっていないんだし、最後まで気を引き締めて」

美月は眉を寄せ、むすつとしながらパシパシ叩く。地味に痛い。分かった、ちゃんとやるから許してくれ、と謝ろうとしたその時。

「キヤーツ」

女性の甲高い叫び声が住宅街に響いた。

「っ、悠太！」

「言われなくても分かってる！」

二人同時に声のした方へ猛然と走った。

第十三話 巡回（後書き）

作「今日は連続投稿してみた。つらかった」

悠「無理しなくてもいいぞ。っていうか何でいきなりこの形式にした」

作「いやあ。なのはの二次創作を最近漁ってるんだけど、どこもこんな風に会話形式でやってたから」

悠「面白そうだからやってみた」

作「Yeah。あと毎回堅苦しくなってたから、ここではじけちゃおうかと」

悠「そうか。そのまま飛び散ればいいのに。ところでこれ、毎回続くのか？」

作「多分無理」

悠「……」

作「ノリなんだよノリ。特に後先考えてないから。あとそんな目で見えるな。悲しくなるから。ガラスのハートにヒビ入る」

悠「柳田みたいなことを言うな。気持ち悪いぞ」

作「柳田？ ああ、あれか。多分この先一回も出ない」

悠「扱い酷いな」

作「いいじゃないか。元々ギャグ要員で入れたんだけど、案外早く本編入っちゃったし」

悠「そつか。それでどうやってオチ付けるんだ？ このままダラダラ書くのか？」

作「感想、指摘などがあればぜひ感想ページの方へ」

悠「おい」

作「それでは今後もよろしくお願いします！」

第十四話 再来

街灯に照らされたコンクリートで固められた地面を蹴り、獅子の如く疾駆する。心臓は殴りつけられたかのように痛み、全身からは急激な運動から生じる以外の原因によって汗が噴き出していた。徐々に現場に近づくにつれて感じる、理性ではなく本能に直接働きかける警鐘。間違いなくアレがそこにいる。

「・・・・・・・・」

月明かり、街灯の光も差し込まない暗い路地裏。あまりよく見えないが、恐らく辛うじて見えるあの細く白い棒状のものは、先端が少し広がっていて五本の突起が出ている独特の形状をもつものは。

「遅かった、のね」

きつと、人間のものだ。

目が慣れて曖昧な像が結ばれ、次第にはつきりとしてくる。白いTシャツに青いミニスカート、少し長めの髪は地面に広がり、そのほとんどが異質な香りを放つペンキによって濡れていた。急に胃から消化物がせり上がるのを感じ、懸命に押し止めようとする。口と喉を押しつぶす勢いで押さえ、吐き気が消え去るのを待つ。

「・・・・・・・・はっ、はあ、はあ、ぐっ、かはっ」

何とか嘔吐することを避けたが不快感が多少なりとも残る。柳田も俺もこんな状態にされる直前まで行っただのか？

「悠太君、構えて。来るよ」

美月は右腕に魔力を集め始める。何が来るのかは言うまでもなかった。

コツコツと音を鳴らしながらゆっくりとした歩調で何かが歩み寄ってくる。そして一つの影が姿を現した。

「吸血鬼　！」

最初に遭った時と微塵も変わらぬ出で立ちで、自らの存在を知らしめるかのように殺気を放ち吸血鬼が現れた。一瞬気に吞まれかけ

たが必死に自我を保ち、持ちこたえた。これは慣れるものではないな。

「どうも、こんばんは。若い男女がこんな薄汚い場所で何様か？ 逢引ならもつと場所を選んだらどうかね」

クツクツと神経を逆撫でする声で嗤う。不気味なことこの上ない。「あなたこそ何用ですか。まあ、足元に女性の死体がある時点で、どう疑われても仕方がないですよね？」

「おいおい。もしかしたら私はただここを通りかかっただけかも知れんぞ？ あらぬ疑いをしない方がいいのではないか」

「全身に血を浴びている人が何を言うのですか。ふざけていると蜂の巣にしますよ」

「はっ、はっはっは。気の強いお嬢さんだ。気品の欠片もない。だがそれくらい威勢がよくないといけない。下に転がっている人形みたいにあっさり死んでしまっからねえ」

吸血鬼は足で、人形と比喩した女性の死体を小石のように蹴り飛ばす。鈍い音と共に二、三回転がり、俺たちの足元で止まった。

「お前、何と云うことを！」

「少年、何故そこまで驚くのだ。息をしない人間、生きていない人間なぞ人形と大して差はなかるう。まさか、屍ごときに同情をしてはおるまいな？」

いちいち癩に障ることを言うやつだ。死者を冒瀆することがどれ程愚かなことか、きつとヤツは解っていない。

「お喋りは此処までです。ここで今までの罪を償っていただきませう」

集束弾を瞬時に形成し、打ち放つ。それは吸血鬼の頬を掠り、後方へ消えていった。

「ほう。どうやらふざけが過ぎたようだな。確かに、雑談はここまでにしておこう」

腕を真上に上げ、その動作と共に吸血鬼の周りに黒い弾丸が幾つも現れる。一つ一つに凄まじい魔力を孕んだそれは、今か今かと開

放の時を待ちわびている様に見える。まずい。アレを食らったら無事では済まない。

「君たちはこの先の計画に支障を来たしそうだ。念のため、ご退場願おうか」

「つ、<Load」「Protect」stand by、ready>」

来るであろう大きな衝撃に備え自身が持っている中で最強の盾を引き出す。何かに対しての絶対防御はないが、様々な系統の魔術を防ぐ万能型の円盾。中世暗黒時代に西欧諸国で多用されていたとされる盾の形状を模し、鉄ではなく魔力と言う材質に形作られ此処に現れる。

吸血鬼は上に掲げた腕を振り下ろした。その合図を皮切りに始まる黒き弾の襲撃。引つ切り無しに降り注ぐ弾を蒼き円盾で防いでいく。凄まじい衝撃に腕が持つていかれそうになるが、何とか耐え必死に盾を展開し続けた。

美月は集束弾を作り出すと、それを黒い弾に向け、撃ち落とそうとする。しかし狙いは外れ、悉く吸血鬼の集束弾に打ち消されてしまった。

十五秒が経過し、盾にヒビが生じたのを見ると、予め準備しておいた魔力石を併用し注ぎ込む。途端にヒビは修復され、展開した瞬間と変わらない、いやむしろ以前よりも強度が増した状態になった。これで、あと三十秒は保てる。それまで応援に誰か駆けつけて欲しいと切に願う。

作り出しては撃ち出し、数が少なくなると作り出す。吸血鬼は作業するように、且つ殺意を籠めて行使する。撃ち始めたときよりもその速度も破壊力も上がっている。三十秒という予測は大きく外れ、十秒余りでヒビが入った。さらに盾に魔力を注ぎ込もうと神経を研ぎ澄まし、右手に必死に魔力を流そうとする。が、その前に「<聖なる盾よ。我らを襲う災厄から身を護り給え>」という呪文が聞こえてきた。

「悠太君。少し休んでいいよ」

そういうと美月は純白に輝く聖盾を現した。中央に聖母マリアの絵が施され、そこから発せられる輝きは全ての闇を振り払うかのようだ。聖盾プリトウエン、かの有名なアーサー王が所持していた盾あるいは船をイメージして構成された、悪に対する絶対防御と美月は後に説明した。かなり高位、または強力な魔術を使われれば消え去るが、ある程度の悪属性の術にすら対抗できる。実に四年もの歳月を掛け完成させた美月の対吸血鬼用の護りだった。

「は、お嬢さんもなかなかやる。しかし、この執着心。何処かで似たようなものを感じたな」

はて、いつだったかなと吸血鬼は思案する。その間も忘れず、絶え間なく暴力の雨を降らせながら。三秒を数えた辺りに、驚きの表情を浮かべ「そうか。思い出したぞ」と、愉快だと言わんばかりに顔をニヤリと歪ませる。

「逃げるだけしかできなかったというのに、たった数年でここまで成長したのか、小娘よ。これは賞賛に値する！　だがこれでは私を殺すどころか、傷一つ負わせることもできないだろう」

幾つもの弾丸を吸血鬼は俺たちに撃ち放ち続ける。聖母の加護を圧倒的な悪意、邪悪なもので打ち砕かんとその勢いを加速させていく。激しい金属音のような高い音が聴覚を強く刺激する。これほどまでの猛撃を美月は防ぎきっており、恐らく俺の円盾のように碎かれることはないだろう。しかし俺はある一つの可能性を危惧していた。それは、魔力切れ。幾ら高い魔力量を誇っているとしても、ヤツと美月とでは明らかに軍配は吸血鬼に上がる。どうする？　このままではこちらの魔力が尽きて殺られてしまうだろう。ならばどうすべきか。なるべく時間を稼いで、応援に誰かが駆けつけてくれるしかない。馬鹿でかい魔力が流れてるんだ。グループのメンバー一人は来てくれるだろう。

「早く、誰か」

助けてくれ。そう願ったそのとき。

「え？」

耳が裂けそうな程鳴り続けていた爆裂音が急に止んだ。前方を見ると吸血鬼は遺憾した様子で俺たち、いやその背後を睨んでいた。

「ふむ。どうやら要らぬ来客が来たようだ。ここに招いた記憶はないのだが、神楽月姫」

「君にとつては招かざる客であつたかルイス」

俺と美月は驚き振り向く。そこには『星の隠れ家』の所長、神楽月が身体から魔力を迸らせ悠然と構えていた。周囲に凶鑑程の大きさの本が五つ浮かんでおり、それらからも膨大な魔力を感じる。何かの礼装だろうか。形状から判断すると詠唱補強、短縮といった効果か。

神楽月はその内の一冊を掴み取り、いつでも始められるとでも言うように目を睨みつかせる。

「この美しい月夜を眺めて緩やかな一時を送っていたのだがな。何やら不愉快な魔力が流れてきたもので、思わず潰したいと思つてね。見た限り、随分私の同僚を可愛がつてくれたようじゃないか。正直吐き気がする」

「君のその敵に対する容赦無い罵詈雑言は、しっかりと同僚に伝わっているみたいだ。ちゃんと新人教育を行っているみたいで安心したよ」

「無駄口を叩いてる暇があるなら辞世の句でも詠んだらどうですか。それくらい的时间なら差し上げましょう」

「冗談を。まだ私にはやらなければいけない用事があるのでね。ここでくたばるわけには」

「見事だルイス。これほど長たらしく此の世への末練を詠ったのは君か愚者くらいだろう」

「お褒めに与りまして光荣だよ神楽月。だが先も言った通り、まだ死ぬわけにはいかない。私は静寂をこよなく愛していてね。死に果てる地も静寂で自然の美しい場所と決めているのだよ。さあ、今日はもう遅い。早急に立ち去るとしよう」

吸血鬼　ルイスは闇に溶け込むように消えていく。しかし。

「　させない」

冷淡な、そして殺気を含んだ声が路地裏にて発せられた。その声の主が誰か理解するよりもずっと早く、速く。

青白い槍が一閃した。

「ギツ！」

槍はルイスの左腕に突き刺さり、消えかけていた影が再び実体を持つ。

「く、やはりなかなかやるのう、お嬢さん。聖なる盾を魔力に還元し、槍に変換、行使の待機を掛けていたか」

「<第一　集束維持停止　暴発>」

苦しげなルイスの言葉にかとも言わず美月は唱える。青白く光る槍はより一層輝きを増し、辺りを包み込む。

「消えて」

瞬間、槍は爆弾へと変貌を遂げた。その内に秘められた魔力が、形という束縛から放たれ、純粋な暴力として相手を襲う。

暴風が吹き荒れる。

道路に規則正しく並べられた街灯からでも感じられた温かみは、美月という人から生まれた光からは何一つ感じられず、ただただ凍えるような、それでいて焼き尽くすような殺意が路地裏に叩きつけられた。

あまりにも眩しく、寂しい光に思わず目が眩む。またこの場所に吸血鬼の愛しそうな静寂と闇が戻った時、ようやく目を開けることができた。まだ視覚が闇に慣れていないためか、すぐには周りの状況が判らなかつた。ずっと感じていた重圧が消えている事からヤツがこの場から去ったのは知っていたが、それが果たして逃走なのか、それとも死去なのか、どちらか判断が出来なかつた。俺は後ろにいる神楽月に確認する。

「所長。吸血鬼は」

「まんまと逃げられたよ。けれど、美月のお蔭で深手を負わせる

第十四話 再来（後書き）

悠「で、やっぱり続けるのか。この形式」

作「うん。何かはまった」

悠「何かって……別がいいけど。それにしても今回はシリアスな感じで終わったな」

作「だね。元々そういう予定だったし。書きたいと思っていたことは無事書き終えたよ。あとの伏線とかも二つ三つ張っておいたし、それに魔術登場できたし良かった、良かった」

悠「読んでみると戦闘描写少ないよな。もっと増やせば？」

作「無理。戦闘苦手」

悠「じゃあ何でバトルもの書いてるんだよ」

作「書きたかったから」

悠「……そうか。序でになんでこんなに長いんだ、今回」

作「ノリに乗ったから」

悠「またノリか」

作「吸血鬼を書いているとノリノリになるんだよね。自然とテンション上がる」

吸「これからも精進したまえ」

作「というわけで次回は『美月さん、鬱になる』の巻。乞うご期待！」

悠「今変なの出なかったか？」

作「気のせい。では感想、意見をお待ちします！」

第十五話 外出

あの時から三日間が過ぎた。吸血鬼との遭遇以来美月は根を詰め
て鍛錬していた。朝から晩まで、基礎練習から魔術の応用、魔力石
の生成又はそれへの魔力の注入、美里やロン、俺との模擬戦といっ
た内容をこなしていることから、当然疲れも溜まっていることだろ
う。しかし、それを表に一切出さないのは彼女が強いからなのか、
それとも弱いからなのか。表面上はいつもと同じように接してくれ
ているが、彼女の笑顔はどこか無理して作っている様に見え、時折
見せる悲しげでそれでいて重大なことを決心するような表情は俺を
どうしていいのか分からなくさせた。その度に路地裏での彼女の言
葉が頭を過る。

『また、私は、ヤツを殺す事が……』

そこに込められた意味、記憶、心。俺自身が知らない過去が美月
を縛り付けているのは確かだ。殺したい程に憎むのだから生半可な
ものではない筈だ。訊いてみたい気持ちはある。美月と吸血鬼の間
に何があったのか、何が彼女を苦しめているのか。けれど訊くべき
ではない気がする。彼女に追いつきを掛ける行為をしたくない、と
いうのもあるが、果たして自分がその領域に足を踏み込んでいいの
か不安だからだ。

ならば、何も知らない俺が彼女にしてあげられる事は？ 安易に
励ましの声を掛けることはしたくない。安易な励ましが傷つける事
があるのを知っているから。そうなら、美月が無理しないように、
少しでも苦しみを忘れられるようにサポートすべきではなからうか。
メンバーとして、パートナーとして、精一杯支えていくべきなのだ
ろう。

午前十時を少し過ぎ、俺は腹部の周りを締められる独特の感覚に
悩まされていた。理由は何ということはない、単なる空腹だ。朝食

は普段よりも多めに取ったのだが、これは何故だろうか。早朝からのトレーニングがいつも以上のエネルギーを求めているのだと直ぐに気付いた。この時間から昼食を、というのは難だが、このままトレーニングを続行するのは些かきつい。仕方がない。早すぎる気はするが外へ出掛けよう。

神楽月に断りを入れた後、私服に着替え廊下へと出た。

「あ、美月」

「悠太君。こんにちは、かな。何処か出掛けるの？」

すると丁度トレーニングに区切りが着いたら美しい美月と出くわした。漆黒のワンピースで身を包んでおり、その容姿は草原での彼女をそのまま持つて来たかのように。前に聞いた話だが、この服は魔力耐性が高いようで、デザインも気に入っているため長年愛用しているそうだ。デザインか。よく見ると胸元に左右対称に広がる翼の刺繍が、双翼の間には透き通った桃色の石が施されている。

「これから昼食を摂る予定」

「へえ。いつもより早いね。そんなにおなか空いたの？」

「腹と背がくっつきそうなくらい。もうそろそろ胃液が絞り出てくる」

「そ、それはヤバそうだね」

薄っすらと冷や汗を掻きながら美月はあははと笑って返す。俺の台詞が半分くらい本気なのを感じ取ったのだろう。若干引き気味だと言わなきゃよかった。

「そうだ、一緒に行かない？ 一人じゃ寂しいし、来てくれたら嬉しいなあ、とか」

微妙な空気になりかけたので咄嗟にそう提案してみた。

「んー」

美月は眉を寄せどうしようか悩んでいる。トレーニングを継続するか昼食を摂るか二択のどちらか選びかねているみたいだ。

「……ごめんなさい。ここ最近財布に余裕がなくなってきたから

遠慮しておくね。宗一君を誘ってみたなら？ 結構そついつののに付き合ってくれるよ」

「無理だな。あいつは術式を完成させようと躍起になってたからな。吸血鬼と当たる前までに必ずって」

あと付き合ってくれるのは恐らくお前だからだと思う。俺が誘ったら返事に鉄鎚ぶつけて来そうだ。

「そうなの？ 術式って事は宝剣でも作るつもりなのかもね。じゃあ優姫ちゃんは？」

「さらに無理。宗一を手伝うんだって鼻息荒くして興奮してた。多分二人とも一、二週間は部屋から出てこないと思う」

「そ、そんなになの？」
微妙に頬を引き攣らせ、でも有り得そうだなと顔が雄弁に語っていた。

そつ。それぐらいの気迫は彼らにあった。優姫に関しては邪魔したら殺されるんじゃないかっていう勢い。恋する乙女は猪に負けず劣らずの爆走つぷりを発揮するということをしめされた良き経験だった。

「ま、あいつらはいいや。それじゃあもうそろそろ行くこつぜ。腹が酷い状態になってきた」

「いや、だからお金が無いから……」

「大丈夫。俺が奢る」

「え！ そ、そんな悪いよ。悠太君に迷惑掛けるわけにはいかないし」

「迷惑だなんて思わないって。これは日頃お世話になっているお礼でもあるんだから、ここは一言『ありがとう』って言うてくれればいいからさ」

「本当に、いいんですか？」

「『ありがとう』、だろ」

「……はい。ありがとうね悠太君」

美月は俺に笑いかけ、提案を承諾してくれた。花が咲いたような

笑みは俺の心に澄んだ水を注ぐ。水は渴きを潤し、ヒビがあればそこから滲み込んでいく。胸の奥から優しい、温かい感情が芽生える。「行こう。早くしないと混んでくるし」

「うん、了解。準備してくるからちよつと待ってね」

女子更衣室の方へ走っていき、数分と掛からずここに戻ってきた。俺より一回り小さな暖かな手を取ると、目的地へ向かうべく本部を後にした。本部から出る直前ふとある事に気付いた。

さつき見せた笑顔、自然な笑みだったなあ、という事だ。しまった。目に焼き付けておけば良かった。少し後悔しながら隣を見る。

「何処に行くの」

「シヨッピングモールでいいか？」

「『ラクリマ』？」

「そう。そこにする」

そこには最近よく目にする不安定な表情。まだ不安そうだが、幾分か雰囲気は柔らかくなっていた気がした。

午前十一時。俺と美月は老若男女、様々な人が行き交うシヨッピングモールへと足を運んでいた。昼食を済ませた後、俺が美月と共にある店を目指していた。そこは俺のお気に入りのところでは是非連れて行きたいと前々から思っていたところで、店名は『Kanata's green tea』という。主に、抹茶を使ったドリンクやデザートが豊富に取り揃えてあり、絶妙な甘さ加減と、和洋を上手く組み合わせた至高の甘味は、抹茶好きにとってまさに理想郷と見えよう。

騒々しいモール内を歩いていく。小さい男の子と女の子が手を繋ぎ、キャハハと明るい声を上げながら横を走り去って行ったり、仲の良さそうな家族が睦まじそうに歩いていたり、何の変哲も無い平和そのものが世界に広がっている。例えどれだけ世間で凶悪な事件だなんだと騒がれていようが、何処かに必ず平穏な光景があつて、何処かに悲痛な光景がある。今見えるものはこの世界にありふれた

ものなのだろうか、それとも見かけること自体が希少なもののだろうか。前者であってほしい。少しでも混乱より平和が多いのなら、きつと世界は明るい。

「それにしてもここはいつも賑わってるな。イベントとかあるわけじゃないのに」

「特別なことがなくても人って結構集まるものだよ。理由があっても、無くても」

「そんなものなんだな、人って」

「そんなものだと思うよ。皆、理由なんて重要視してないから皆、理由なんて重要視してない。

その皆の中にどれだけの人が含まれているのか。その中に、俺は、美月は入っているのか。

「また何ぼーつとしてるの。最近多いよ」

「ん？ ああ悪い」

「しつかりして。今日は悠太君がエスコートするんでしょ」

「そうだった。それじゃ美月様。どうか手をお取り下さい」

「美月様って……別にいいかな。はい、悠太様」

恭しくお辞儀をし手を差し出すと、美月は瞳を閉じ、手を重ねた。そしてしつかりと握る。

「では行きましょうか、美月お嬢様」

「グレードアップしたね」

「お姫様でもいいぞ？」

「一国のお姫様か。実は憧れてるんだよね、そういうの」

「いつか城を用意してさしあげましょう」

「期待してるね。頼りない王子様」

「頼りないって言うな」

「……ぶっ」

「笑うなよ」

お互い周りの喧騒に負けない、活気に負けないくらい笑顔を輝かせ、再び歩み始めた。

第十五話 外出（後書き）

悠「んで、やっぱり思うんだ」

作「何を？」

悠「登場人物全員キャラがちよこちよこ変わる」

作「難しいよね。キャラの維持って」

悠「しかも台詞やたら多いし。地の文少くないか？ あと意味不明な文がある」

作「台詞多いのは仕方が無い。地の文は確かに少ないかな。意味不明？ 世界は明るいか理由の重要性とか？」

悠「そう。それ」

作「なんとなく入れてみたかったんだよ。特に最近平和とは何かとか正しいとは何かとか、そういうの呼んでたから自然と手が動いて」

悠「無理するな。一歩間違えればグダグダのボロボロだ」

作「イエッサー」

悠「さて、次は『パフェを満喫したら昔話だ、の巻』か。ついに美月の過去が？」

作「そうだね。美月の胸に秘める想い、熱意、誓い。そういったものを書ければいいなと思ってる」

悠「頑張れ」

作「皆様からのメッセージ、誤字脱字報告、意見など24時間態勢で待ってます。どしどし送って下さい！ それでは（・・）ノシ」

作「もうそろそろ新しい作品書こうかな」

悠「この作品を完結させたらな」

第十六話 発射

その後、俺たちは『Kanata's green tea』で和風パフェを満喫していた。店内は木を基調とし、それを強調させる白い壁は清潔感を与え、また明る過ぎない照明は何処か懐かしく落ち着いた印象を持たせる。店員の制服は緑と白、紺の三色で構成されており、緑のバイザーと縦ラインの入った白いシャツ、紺色のスカート、深緑のサロンエプロン、シンプルながらもデザイン性に富んだ制服は店のイメージである『次世代和風カフェ』に適合していた。女の子の店員に案内され、店の一番奥に位置するテーブルに着席する。それからまもなく水とおしぼり、メニューを持ってきた店員に小豆パフェを即座に注文した。美月は私も同じものをお願いします、と頼んだ。希望の品は二分弱で届き、俺は相変わらず輝きを放つ至高の一品に目を奪われた。ガラス製のフルート型グラスには下方に直方体に切られたナタデココが沈み、上方には抹茶アイス、小豆、生クリーム、さくらんぼに彩られていた。アイスには甘い餡蜜が掛かっており、先ほど消えた食欲が急激に覚醒する。全く、俺の腹は現金だ。美月はというと、目をキラキラと輝かし今か今かと待ち遠しそうにそわそわしている。訓練時、戦闘時に見せる冷静な彼女とはあまりにもかけ離れていて思わず笑ってしまった。

「食べようか」

「うん」

俺の言葉を食事の合図と受け取ったのか、美月はスプーンを取るのも煩わしく、次々とパフェを口に運んでいく。感想は聞くまでもなかった。スプーンを手に取りアイスを一口。うん、最高だ。最高の味だ。そのまま二人して無言でパフェを口に頬張り続ける。濃いめの抹茶アイスの渋い味と頬が落ちそうなくらい甘い餡蜜の相対する二つのトッピングが口内で旋律を奏で、小豆や生クリームがそこにアクセントを打つ。この和と洋が合わさった独特の甘みは、幾度

来ても飽きさせず、自称抹茶ファンである桜井悠太にとって魔術以上に奇跡的な存在であった。

「さすがだ。ここはちゃんとポイントを押さえている……!!」

「本当に美味しかった。こんなに美味しいパフェ、初めて食べたよ。この絶妙な甘さ加減がなんとも」

高さ二十センチはあるパフェを三分以内に食いきる美月。もう少し味わったらどうなのだと思った。いや無粋だった。この宝を前にして味わおうなどという思考ができようか。否、できるはずがない！

「そうか、お前にも分かるのか。よし、なら幾らでも食すがよい。我が同胞となつた汝に祝福を！」

「悠太君。頭大丈夫？」

「いつでも俺は冷静沈着、聡明だ」

「嘘だね」

「嘘だ」

「……」

いつもより涼しげな店内で心行くまでデザートを堪能する。ああ、幸せだ。何時間でもここに居たい。結局一時までひたすらパフェ、抹茶オーレ、汁粉を食べ続けた。

俺が正気を取り戻したのはレジで代金を聞いたときであった。美月さん、パフェ五つも食べたんですか。野口英世が六人、レジの中に吸い込まれていった。

「美月、ボスを頼んだ！」

「任せて。悠太君は雑魚をお願い。私は親玉を集中的に潰すから」

「了解」

拳銃を構え次々とこちらに襲い掛かってくる異形共を打ち落とすていく。二人の放った弾は寸分の狂いもなく彼らの眉間に命中していき、妙に現実に再現された腐った皮膚や紅色の血飛沫を撒き散らし崩れ落ちた。何人、いや何体も撃ち殺しても襲撃してくる異形

を見て、冷静に状況を判断する。恐らく親玉を叩かない限り、延々と現れ続けるのであろう。

異形の群れの中でも一際目立つ巨大な黒犬。赤い舌をだらりと下げ、白い眼球がぎよるぎよると動き回り、皮膚は異臭が漂ってきそうな配色をしている。白い牙が垣間見える口から吐き出された火の玉が俺達を上空から襲い掛かる。それを巧みな足捌きで避けていった。

「美月、時間が少なくなってきた」

「残り十秒になったら親玉を集中砲火しよう」

「OK」

空になったカートリッジを捨て、弾を補充する。ロード完了の文字を認めると、再び眼前に広がる敵の群れを見据え、照準を合わせた。

昼食及びデザートの後、美月の提案でラクリマのゲームセンター『ゲームワールド』に行く事となった。なんでも、今まで一度も訪れたことがなく、是非ともこの機会に訪れてみたいらしい。別段拒否する理由も無く、行きたいのであればとそこに向かうことにした。ゲームワールドはモールに近接して建設されており、他に類を見ない巨大なゲームセンターで、太鼓の達人やリズム天国といった誰もが知っているアーケードゲームから、インベーダーゲームやパックマンといった、こんなものまだ置いてあったのかと疑問に思うほどレトロ、またはマイナーなものまで揃っている。

数分歩くとすぐにドアが現れた。左右に開かれた自動ドアから入って進んでいき、二枚目のドアを開けた。

入ると同時に風、そしてそれに乗った音が顔に吹き付けられた。中から響いてくる機会音、人の声、音楽。乱雑に混ざり合い奏でられる壮大な曲がゲームセンター全体を揺るがしている。一見暴力的にも聞こえる旋律に対する不快感は無く、むしろ昂揚していく感覚に捕らわれる。こんな無秩序な音の連なりが何故こうにも心を揺

さぶるのだろう。ただ自然と胸の鼓動が高鳴るためか、それとも人々の声に安堵を覚えるためか。普段聞くことの無くなっていた喧騒が聴覚を刺激した事により郷愁にも似た思いを抱かせているのだろうか。分からない。自分の事だと言うのに全く。俺はこうした平和な日々を、騒がしい日常を愛おしく感じているのだろうか。

俺が下らない事に思索している一方、美月はというと。

「ここがゲームセンターかあ」

と、好奇心に満ち溢れた目で見渡していた。始めはその騒々しさを微かに漂ってくる煙草の臭いに顔を顰めていたが、すぐに慣れたのか、今では機械の中に収容された人形やお菓子の数々に目を輝かしていた。

「すごいよ！ ねえ見て見て。あんなでっかい板チョコ初めて見たよ！ あ、あそこに巨大なパンダの人形が」

「落ち着け。景品は逃げたりはしない」

「でも先に誰かに取られたりしたら悲しいじゃない？」

「そういうことはよくあるけど」

「弱肉強食の世界なんだねえ」

「いや、そこまで厳しくないけど」

冷や汗を垂らしながら受け答えする。こんなにはしゃぐ美月を見るのは初めてだ。あまりのハイテンションに若干引いてしまったが、それでも楽しんでもらえてる事と屈託のない笑顔でいてくれる事が嬉しく感じた。

「あれは何？ 恐い絵が描かれてるけど……」

感慨に耽っている和美月がとある方向を指差し訊ねてきた。そちらに顔を向けると、そこには暗い色彩の背景とグロテスクなゾンビが描かれた看板が設置されたコーナーがあった。確か『イビルキヤツスル？』というタイトルだったはず。イビルキヤツスルは、次々と襲い掛かってくるゾンビ達を打ち落とすいくシユティングゲームで、銃型のコンソールと床にある移動ボタンを併用したマッドで操作する。かなりリアルに再現されたゾンビや街並みもさることな

がら、最新の技術によりどのような細かなものでも繊細に映し出す高画質の巨大なスクリーンと、左右に設置されたスピーカーから発せられる迫力のあるサウンドはこのシリーズのファンだけでなく見る者全てを圧倒する。横で見たことがあるが確かに昨今では見られない操作性とグラフィック性能は他のどの作品よりも抜きん出して、何度見ても飽きさせない。恐らく一度やったらあまりの楽しさに時間を忘れ、どんどん嵌まっていくだろう。幾度か試しにやってみようか考えたことがあるが、中毒症状が出るのが目に見えているため止めていた。そもそも俺はブレイブソード？の攻略と魔術の鍛錬で忙しいからゲームセンターに行く暇がない。

美月に軽くこのゲームについて説明してやると、「やろう！」と凄く乗り気だった。期待を湛えた、輝きを湛えた視線をこちらに振り注いでくる。返答は言うまでもなかった。

順調に攻略していき現在第四ステージに進んでいた。全部で六ステージあるので、此处を持ちこたえればエンディングも近い。このゲームは主人公の台詞が一切なく、映像で描かれるシーンによって物語を把握させる手法を取っている。なんでもプレイヤーが感情移入しやすくなるらしい。本当にそうなのかどうかは体験した者だけが分かる。

さて、今は物語りも中盤を過ぎ、いよいよ終盤へと差し掛かるところだ。街に突如現れたゾンビ、そして連れ去られたヒロイン、彼女を取り戻すため主人公達が黒幕の元へ進んでいく、というストーリーで、今黒幕が自分の友人だと分かったところだ。すぐさま追いかけてようと足を踏み出した瞬間、巨大な獣型のゾンビ『ケルベロス』とゾンビ群がその道を塞いだ、って感じだ。

ケルベロスが口から火の玉を吐いたり、配下と思われる異形達がボスを護るように、あるいはボスの攻撃を補助するように攻撃してきたりと第三ステージまでのゾンビの集団を倒すものとは違った対応を迫られるようだ。それまでは美月と画面を半分にして役割を振

っていたが、このステージはもう少し複雑にした方が良さそうだ。

「美月、ボスを頼んだ！」

「任せて。悠太君は雑魚をお願い。私は親玉を集中的に潰すから」
「了解」

複雑と言っても命中率の高い美月がボスを、素早く何回もトリガーを引ける俺が雑魚を担当するというのだが。トリガーを引きながら冷静に周りを見て、作戦を立て、実行に移す。これはスポーツや戦闘においても通じるものがあり、実は結構いいトレーニングになるのではないかと、思ってしまった。遊んでいるだけだと言われたらそこまでだけど。

銃口から火が吹き異形の者達を次々と闇に葬り込んでいく。絶え間なく、波が押し寄せるように襲い掛かる異形を打ち飛ばしては狙いを定め、また打ち飛ばしては狙いを定める。雑魚の攻撃パターンは一定だ。単調、単純とも言える。ただ量が多いだけ。しかし今その”量”が大きな壁として俺達の行く道を塞いでいた。

「美月、カートリッジが無くなって来た。早く片付けないと」

「分かってる。一回ここで手榴弾を投げて一気に前を開いて集中連射するよ！」

「OK」

美月は銃のエンブレム部分にあるボタンを押し、三つある内の一つを前方へと放り投げた。きっかり三秒後に画面全体に爆風が広がる。視界が明けると散り散りになった異形の破片と片足が吹き飛んだケルベロスの姿があった。雑魚を一掃する目的を果たすと共にボス本体にも深手を負わすことが出来たようだ。

二人同時に引き金を引く。銃弾が相手の眼球、眉間、喉仏、双肩前足、至るところに穴を開けていき、仕舞いには彼の体躯は蜂の巣となった。獣が咆哮を上げ散らばっていく。細胞一つ一つが崩れ、砂のように崩れ、そして、消えた。

4th stage Clearという文字が画面に躍るのを見て二人でハイタッチを交わす。

「これであと二ステージか。このまま勢いに乗ってクリアしようね！」

「ああ。ここまで来たら、何が何でもエンディングを見よう」
向かい合い笑みを零す。このゲームをクリアさせる事にもはや疑いの余地もない。いける。きっと二人でこのゲームを終わらせれる。さあ行こう。ここからが本当の戦いだ　！

そして画面では、主人公達が城内に乗り込みおぞましい量のゾンビが階段を、フロアを埋め尽くしている光景を目の当たりにしていた。

画面を二人が見て凍りつく。

白い目を剥き出しにし苦しげな呻き声を口から漏らしているゾンビ。それはいい。そこは今までと全く変わりはない。問題はその量だ。床に、階段に、扉に、天井に張り付き、エントランスの中央にいる主人公達を幾千にも及ぶゾンビ達が囲んでいる。はっきり言って吐き気しかない。

「……」

「……」

5th stage。迫り来るゾンビ達を撃退し、最奥部に待つ巨人を始末せよ。

現在残り弾数10。カートリッジ14。手榴弾3。今後のことも考えると、あまりにも絶望的な数字だった。

「無理だね」

「無理ゲーだな」

スタートの文字が出ると共に、俺達は無我夢中で銃弾を放った。

第十六話 発射（後書き）

すみませんでしたm(――)m

本来は美月の過去話の予定でしたが、あれも追加、これも追加とやっていたらいつの間にかほんわかデートになってしまいました。

次回は、次回こそ載せるのでそうかご期待を。

それでは何かご意見、誤字脱字報告などありましたら感想またはメッセーシボツクスの方までお知らせ下さい。お願いします(・・)ノシ

まどかマガカ放送決定！ 嬉しいです(・・) ()

第十七話 困惑

結局、イビルキャツスル？は攻略できず本部へ帰り時間となった。帰り間際美月が行きたい場所があると言い出したので付いて行くと、近くにある臨海公園に辿り着いた。そこにあるベンチに座り夕日に染まる橙色の海を眺める。見渡す限り海、というわけではなく、むしろ進出したビル群やボートが視界の三、四割を占めていたが、それでも壮大さを感じさせるこの光景からは感激と驚嘆、二つの所懐が押し寄せてくる。遠くには水平線が見え、雑多な音や潮の流れる音、心臓の音、あらゆる音がやけに大きく聞こえる。水面が陽光を放散し宝石にも劣らない輝きを放っている。普段気にも留めない物事に最近目を向けるようになり、こうした身近に潜む宝物が如何に貴いのか、十六歳なりに考え、感じ、大切にしたいと考えるようになった。若造が何を偉そうな事を言っているんだ、社会を、人生を語るにはまだまだ経験が足りないとか嘲笑されるかもしれない。その通りだと思う。彼らにしてみれば、俺達が過ごした日々はほんの瞬間の出来事ではないのかもしれない。そんな短い間で経験したもののだけで人生を語るなんて愚の骨頂だろう。でも、今だからこそ感じられる事や思う事を蔑ろにしたいくはないのだ。尊重したいとさえ思う。大人になるにつれて育っていく精神、思考。代わりに廃れていく純真、無知。子供と大人の板挟みの状態である思春期の今、何を考え、何を感じ、何をしたいのか。いつまでも熱意、希望を忘れないよう胸に刻み歩んで行きたいから、俺は今でしか出来ない事を実行していくんだ。

「今日は、ありがとう。とても楽しかったよ」

ぼんやりと考え事していると不意に美月が言った。

「俺も楽しかった。でもごめん。気づいたらもう六時過ぎだ」

「なんでごめんって言うの？ 美味しいもの食べられたり、新しいことを経験できたり、いい思い出を作れて、私、嬉しかった」

「そう言ってくれると俺も安心というか、嬉しいよ」

美月は海の方へ目を向け、そして静かに目を閉じた。陽が彼女の顔を紅く照らし、整った顔立ちと真珠のような肌がより強調される。それは言葉で表しきれない程美しく、燦然と輝いており、あの星月で彩られた夏野での邂逅を想起させた。

思わず見惚れ、呆然としていたためか、美月が「どうしたの？」と顔を近づけ、じっと見つめていた事に気付かなかった。なんとか驚いて無様に転げたり痙攣したりせずに済んだが、それでも赤面だけは回避できなかった。俺の様子に疑問を抱いたのか首をこくと傾け、不思議そうにしている。何でもないと告げると、美月は頷き再度黄昏時の海に視線をやり、言葉を紡いだ。

「今日ね。何度か話そうかなって思ってた事、言うね」

「話そうと思ってた事？」

「そう。悠太君には話してなかった吸血鬼のこと。もし良かったら聞いて欲しい」

豈図らんや（あにはからんや）、それは俺が訊きかねていた事だった。無言でいると肯定と受け取ったのかポツポツとその概要を洩らした。

「まだグループに入って間もない頃。メンバーが所長、ロンさん、美里さんと私、そして至さんの五人だけだったの」

「至さん？」

「そう、昔居たメンバーで、私にとって父のような存在だった人とても優しくしてくれて、魔術や勉強を丁寧に教えてくれた師匠でもあったなあ」

その人物を話している三月の表情は安らかで、懐旧の情がありありと伝わってくる。それと同時に痛悔の色も。

「小学六年生のある日、私は至さんと一緒に夜道を歩いていたの。ここ最近騒がせている謎の人物が近くを徘徊しているから襲撃に会わないように送り届けるからって。私は至さんが付いてくれるなら安心だ、そう思った。でも」

「もしかしてその謎の人物に会った？」

「うん。正確には会ったじゃなくて見たって感じかな。なるべく明るい道を歩いてただけで、必ず通らなくちゃいけない道があって、そこを歩いていたら見たの。その謎の人物は地面に突っ伏してた。辺りには夜でも分かるくらい赤い血で濡れてた」

つまり、その人物は、事切れていたのか？　そこから導き出せる事実の一つ、その人を殺した人の存在だ。そしてある予感がしていた。

「死体の傍には黒いマントを羽織った如何にも不吉な大男がいた。私達が迂闊だった。人払いの境界が張られていたのに気付かなかったのだもの。巧妙に魔力を隠されていて一切気付かなかった。今更何を言っても仕方がないけど。それから大男が至さんに襲い掛かって、逃げろって言われて、必死に走って、交番に駆け込んで。そして翌日知ったのは謎の人物の死亡と、新たな指名手配犯、そして至さんの死。気付いたら手元には青玉のペンダントだけが残ってた」
そう言ってポシエットから縦長のケースを取り出した。

藍青色のコットンが外装となっており、美月は上蓋を外し中の物を見せる。鮮やかな色彩と光芒を放つそれは美しさだけでなく、魔術的な施し、持ち主を外敵から護る強力な術式が練り込まれている歴とした高級礼装であった。雫を象った青い宝石の鋭角部分からは焦げ茶色の紐が伸び、また石の中央には稲妻を変形させたような紋様が刻まれている。それに見覚えがあったが、いつ何処で見たのかまでは思い出せなかった。美月は蓋を閉じ、大切に、慎重にポシエットへ仕舞い直した。

「本当はこんな考えは駄目なんだ、こんな感情を抱いてはいけない、って事は分かってる。でも思わずにはいられない」

一呼吸置いて、彼女はその胸の内を晒した。

「私は吸血鬼を殺したい」

「至さんの命を奪った手を、最期を見た眼を、奪おうと考えた脳味噌を、吸血鬼の全てを撃ち抜く。そのために腕を磨いて、身体を鍛えてきたんだから」

自らの手で仇を討つ。この誓いは四年の歳月が経った今でも変わらない。ずっと続いていく筈だった幸せな日々を壊されたのだから。勿論現在送っている日常は幸せだ。本心から思っている。けれど、こうして元気に幸せに暮らしている姿を、小六の頃とは比べ物にならないほど成長した姿を見て貰いたかった。この願いが叶うことはない。

「絶対に会って、この手で必ず」

「駄目だ。やってはいけない」

もう一度、誓いが揺るがないものだとか確かめるように呟いた私の言葉は、直後、否定された。よりによって自分のパートナーに。

「恨んだり、憎んだり、悔しかったりするのとは分かるけど。美月の魔術を、そんな事に使って欲しくない。君の魔術はとても美しく、神々しくて。そんな事で汚しちゃいけない。それに殺したところで至さんという人は帰ってこない」

何を言っているのだろう。何を分かると言っているのか、何を汚してならないのか。じゃあ何？ 吸血鬼を質量兵器でも持ってきて殺せと言うの？ ふざけないで。綺麗ごと言わないで。帰ってこない？ そんな事とつくの昔に理解している。私に出来る事は平穩無事に過ごして行く事だけ。ただ私がそうするのを拒んで、他の方法が見付からなくて、そうして敵討ちという手段に縋り付いた。私はこの選択を是とし、貫き通し、今の私が形作られた。形になったものを崩して一から創造するのは至難の技、そうそう出来るものではない。無論崩す気なんて更々無いけれど。

「それでも私はこれを成し遂げる。誰から何て言われようと、絶対に、必ず」

悠太君は私の言葉をどう受け取ったのか。私のことをどう見てい

るのか。語るまでも無い。

「意思を枉げる気は？」

「ないよ」

枉げる？ 何故さつきから馬鹿げたことしか言わないのだろう。

ここまで不愉快な気持ちになったのは初めてだ。私の存在そのものを否定された気分だ。復讐に走ってははいけません。そんな綺麗事がこの世に通じると思っているのか。もしそれで全部片付けられるのなら私はこんなに苦しんでいない。慚然としたまま私は彼の目を見た。

「意思を枉げる気は？」

「ないよ」

俺の質問にそう即答する彼女の眼は強固で、梃子でも折れないくらい強靱だった。その眼を見て考えてしまった。果たして彼女には今と過去以外、つまり未来が見えているのだろうか。過去や現在に目を向けすぎて、未来がそれらに摩り替わってしまったのではなからうか。もしそうだとしたら、彼女はどう道を歩んでいくのか。このままでは駄目だ。彼女は道化になってしまう。ただ吸血鬼に操られて無様に舞台上で舞い踊る人形になってしまう。いけない。ちゃんとして先を見てくれ。「過去を見捨てる」なんて言わないから、未来を見てくれ。至さんとはんでもない呪いを残した。その呪いは掃つても、掃つてもすぐに再生し、美月自身を蝕む。お願いだ。過去に囚われたままでないでくれ。将来を見てくれ。それだけがこの呪いから逃れる唯一の方法なのだから。

「なあ、お前の言う通り復讐心でこれまで来たのだとして、四年間をその想いだけで来たのなら」

私の目をしっかりと見て話し掛ける。彼の瞳はどうしようもない程、はつきりと困惑の色が窺えた。そして。

「その後どうするんだよ。その願いが叶ったら、美月は」

「どうもしない。いつも通り、やって行くだけ」

本当に出来るのかと、彼の沈黙からはそんな意を受け取れる。当然だ。私の心、その奥底で燃えている復讐の炎が消えても、多くのものが残……る？

そこで私は気付いた。沢山残るけれどもそれはグループや友人、魔術といったものだけで、これから未来へ歩む力となる『夢』がない事に、今更ながら気付いたのだった。

美月とは別れる時まで言葉を一切交わさなかった。本部を出る時とは正反対の面持ちに嘲笑する。この馬鹿野郎。好きな相手を悲しませてどうする。

俺は叶った後の事を訊いた。彼女の答えは不安定で頼りなく、先が見えない。殺すまでの道筋が鮮明で、外部から針すら通せなくらい余地がない。が、その先なら何とか出来る。もし言葉通りにやっついていけるのであれば、俺もまた普段と同じように過ごしていく。もし迷ったり立ち止まったりするのであれば、俺は迷わず手を差し伸べる。努力しなければいけない。彼女を輝きある未来へと導けるように。

さて、まずは自分の身くらい護れるくらいにはならないとな。

道のりは長そうだった。

第十七話 困惑（後書き）

今回は過去話と美月が魔術を必死に習得した理由について書きました。

なんだか美月のキャラがぐにゃぐにゃになってしまった気がします

（汗）

努力家で真面目、戦場では冷静、そして執念深い。それが美月です（キリッ）

当初はのほんほんわか、戦場ではクールビューティーな少女だったんですけどね。

のほんほんわか美里さんに献上してしまいました（笑）

ここから遂に大詰めを迎えていきます。

果たして吸血鬼の狙いは何か。

死闘の結果はどうなるのか。

最近ほったらかしにしていたロンさんや美里さんなどのメンバーがどのような役回りをするのか。

今後もよろしくお願いします。

ご意見、感想、誤字脱字訂正などがありましたら、感想またはメッセージボックスの方まで。

では（・・・）ノシ

第十八話 始動

とある工場の一角、おおよそ中心部に位置している建物を吸血鬼は根城にしている。この工場は山下にあり、また街からは二十キロメートルは離れている。普段ここ一帯で聞く事の出来る音は風が梢を揺らす音、動物達の鳴き声といった自然の音のみ。例外があるとすれば彼らがここに居る時だけだろう。

現在、その例外が適応される状況下にあつた。漆黒に染められた大柄な男の顔は怒りと血で真っ赤に塗れていた。原因は二つ、彼自身が爪を突き立てていた事と先日 of 路地裏での出来事だ。矜持を酷く傷つけられ狂い壊れる。全てを壊そうと不吉な笑い声を立てる、咆哮する、慟哭する。

コロスコロスコロス。あの小娘、よくもやりおつたな。まさか私にここまで傷を負わせようとは！ 屈辱だ屈辱だ屈辱だ！ 恥辱恥辱恥辱！ 何たる侮辱！ アヤツの愛弟子だから手加減してやったというのにこの仕打ち。腸をぶちまけて眼球を潰し骨を砕き関節を折り曲げ悲鳴を残酷な音で打ち消すような残酷さを窮めた最悪の罰を与えなければ気が収まらない収まらない！ 早くしなければ狂い死にそうだ早く動かなければ動かなければ汚辱を与えなければ与えなければ。もうすぐ、もうすぐ辿り着くのだ。あんな奴らに邪魔されて失敗に終わるような事だけは避けなければいけない。落ち着け、落ち着け、落ち着け。私が負けるはずがない。必ず成功する必ず始末できる。あんなひ弱な脆弱な腕など捻り潰してくれ！

時に呟き、時に叫ぶ罵詈雑言、支離滅裂な言葉の数々が広々とした空間に響き渡る。白目を剥き焦点は定まっておらず、また外見も相まって醜悪なピエロのようだ。道化のように笑う、嘆く、踊る。そうしている内に、目蓋の上部から徐々に真紅の瞳がゆっくりと降りてくる。時間を掛け、眼球の中心に炯炯とした赤い輝きに戻る頃には落ち着きを取り戻していた。先ほどの名残、未だに荒い呼吸を

を、魂を、魔術を、万象を解析しなければ。そうと分かれば早い。もっと奪って奪って奪い尽くして解体し搾りカスになるまで吸い尽くし取り付くし一つ残らず掻き集めさらなる標的を求めて徘徊しまた奪って奪って奪って　！　ハハハもうこうしてはいられない。自我が保てない。頭の中にあるのは略奪のみ。早く血を、血を我に！ 次の瞬間、工場内からは私欲に溺れた暗影が姿を消した。魔術師から狩人へと変貌した彼は夜の寂れた街へと繰り出した。

そして数秒後、人知れず第一の魔術陣が輝きだした。

「吸血鬼の潜伏場所が判明した」

美月との外出から四日後、仕事が終わりに、皆各々帰り支度をしていたときに緊急集会を開くという言伝を受けた。すでに九時を回っており、外は暗闇または街灯の光に包まれている。ここ最近はず音に夕食の準備をしなくていいと伝えているため迷惑は掛けていないはずだ。けれど家には妹一人、両親はまだ仕事で帰ってきていないだろうし心細いだろう。さらに猟奇事件が発生している真っ只中だ。もし何かあったら悔やんでも悔やみきれない。この会議が終了し次第、早急に帰宅するでしょう。

会議室内にそれぞれ自分の席に着き、神楽月の入室を待つ。一分もしない内に当人は現れた。手には何枚かの資料と思わしき紙があり、遠くからなのでよく見えなかったが確かに吸血鬼をいう文字が見受けられた。

他のメンバー同様に席に着いた彼女の第一声は、予想はついていたが、あまり喜ばしい内容ではなかった。敵のアジトの発見。すなわち死地に赴く事になる、と告げられたに等しい。それと共に、確実ではないが美月が何かを殺す場面に出くわすかもしれないのだ。心に暗い影が差し込む。

「ルイス・クライン。通称吸血鬼。解析系魔術の第一人者。過去

に不老不死、死者甦生、平行世界の移動といった魔術研究に携わり大きく貢献してきた人物だ。単に研究者だけでなく、規則破りの異端者を何人も捕縛、または殺害し功績を残した一流の戦闘魔術師でもある」

「死者甦生……という事は所長の元同僚ですね」

「そうだな。前に話したか？ 優姫」

「はい。かなり前にお聞きした記憶があります。昔そこで研究を行っていたと」

神楽月はそういえば話していたな、と納得した素振りを見せた。それに対し、俺はきつと喫驚の色を顔にしていただろう。当然だ。今この時まで神楽月に関する過去を全く知らなかったというのに、まさか吸血鬼と繋がりを持っていたとは誰が予想できようか。

けれどもこれは嬉しい事実だ。相手を知っているという事は対策を練る際の軸を立てれるという事。つまりより有効的な策を案じ、戦局をより良い方向へ導ける。このアドバンテージを生かす他はない。

「それではルイス・クラインの捕縛具体案を練る。皆、協力してくれ」

手元に一人一つずつ資料が回り、対吸血鬼計画、最初の一步が踏み出された。

第十八話 始動（後書き）

吸血鬼は基本狂っています。

次回は決戦前夜の内容を投稿します。
戦闘はその次か、そのまた次になりますので、少々お待ち下さい。

第十九話 前夜

ついにこの時が訪れた。拳を強く握り、この決意、歡喜の程を確かめる。手に赤みがかつた部分がほとんどなくなり、私たちが黄色人種に区分された謂れを知らしめるように変色する。玄関を抜け家族に帰宅を告げた後、自室のベッドへと飛び込んだのは十時半過ぎ。最初の頃は門限がどうのこうの言われていたが、今では諦められたのか全くその事について触れてこない。心の中で陳謝し、いつか安心させるからと誰に聞いてもらうわけでもなくぼつりと呟いた。ベッド上で仰向けになり、ここ数週間の出来事を思い返す。

何となく入っていった雑木林を抜けた先に広がっていた草原で、桜井悠太と邂逅した。病室での再会の場面がまず浮かび上がった。自分でもはつきりと分らない。何故悠太の事が気になるのか、あの時また会いたいと思つたのか。この気持ちを手く表現する言葉が見つからない。別にかなり気になるわけではない。ただもやもやした気分が嫌だ、ただそれだけ。

さて、そんな少年が提示した一つの問題。目的を果たした後、これからどう生きていくのか。夢を持たず、過去と現在に縛られていた私が道を歩む方法とは何か。今まで通り？ 本当に出来るの？

まるで問われているようだ。告げられているようだ。本当に吸血鬼を殺したいの？

実のところ君は吸血鬼という存在そのものを求めているのではないか？

憎悪の対象となる、原動力となる敵を。かたき

私の”今まで”は吸血鬼に成り立っていた。人生の軸が消えたら恐らく築き上げたもの全て一切合財続かない。軸を無くした独楽はガタガタと音を立て、もがいて、もがいて、次第に勢いは衰え止ってしまつたらう。

私は無意識に求めているのかもしれない。新しい軸を。そしてそ

の為に足の動かし方を教え、道標となつてくれる人を。

だから、こんな淡い気持ちを抱いているのだろうか。

いいよ。そこまで言うなら私を導いて。明るい未来へと導いて。

全てが終わつたら新しい始まりと一緒に探して欲しい。この胸に宿る万感の想いを告げよう。私のパートナー、桜井悠太。公私共に支えあつていきたい。そうした関係に、なれたら。私は……。

自分の心境がここまで穏やかなものとは思つてもいなかった。俺はただただ自分自身に驚いていた。いつもと同じ、随分と殺風景になつてしまった地元の町並みを特に考え事もせずにはんやりと眺め歩いていた。何故だか違和感が体に付き纏う。その正体は？ 暇だったこともあり、自宅までの短い時間で黙考することにした。結果行き着いた一つの答えは、死地に赴くことになんら恐怖を抱いていない事だった。

もしかして自分は恐怖に対して非常に鈍感なのか。いや違う。なら初めてアイツに襲撃されたときに感じたものは何だというのだ。無視していい議題ではないかと思うかもしれない。きっと以前の俺ならすぐに忘れて、次に集中するだろう。しかし、そうはしなかった。明確には分からない。でも理由を知らなければならぬ気がした。義務、魂レベルでの強制。魂が答えを求めさせている。本当に何なんだ。何故取り返しのつかないことになるかと、魂は言うのだ。

尚も俺は考える。いや考えさせられた。恐れを抱かない理由。命を掛けた、得るものと失うものが明らかに釣り合わない賭博行為。あの人が生きていた頃はよく訓練という名の虐めを受けていたが、実戦での緊張がほぼ無くなるのはありえないことだろう。祈祷の術や治癒を扱えないこと、本来は習得することは無理と言われた集束系魔術が行使できたこと。治癒に特化した桜井家が他の魔術を行使する事は実質不可能だ。突然変異。様々なイレギュラーがこの身に発生しているのは明らかだ。深慮する。もしかしたら俺はこの家の

生まれではないのか？ 養子として別の所から貰われたのか？ 解らない。判らない。一体俺は何者だ？ 突然変異は俺の精神に何らかの異常をもたらしているのか？ 混乱する。考えがまとまらない。いまいち思考回路が繋がらない。だが思考を止めたくない。

結局答えは見つからず、玄関を潜ることとなった。

求まらなかったことに後悔することはなかった。いや、後悔する機会なんて訪れなかった。何故なら俺は……。

第十九話 前夜（後書き）

久しぶりの投稿です。

長い間更新を止まってしまう住みませんでした。

なんと三ヶ月ぶりにPCに触りました。感動です。

せっかくなのでノートに書いておいた分の一部を載せました。

またしばらくPCから離れるので、早くて七月末に更新になると思います。

まだまだ稚拙で分かりづらい文章ですが、これからも読んでいただけるとうれしいです。

では、またいつか。

意見、感想、修正点があれば、この小説の感想ページまでお願いします

7/18 加筆しました。結構重要なものです。

第二十話 食事（前書き）

最近文章が短い気がする。

かといって長すぎると読むの疲れさせるかもしれない。

丁度いい具合の量ってどれくらいなんでしょうね。
では本編へどうぞ。

第二十話 食事

十時二十分。ようやく帰宅を果たした俺は合鍵を使って家の中へと入り、誰に告げるわけでもなく「ただいま」と言った。いつものおかえりという出迎えの言葉は聞こえない。無音をそのまま形にしたような静寂が耳を刺し、胸に言いようのない寂しさが込み上げる。幸音は多分上階で勉強か就寝の準備をしているか、あるいは既に床に着いているのだろう。ふうと溜息を吐き、俺はリビングまでの短い木張りの廊下を足早に通り抜けた。

リビングに入り、夕食が用意されているであろうテーブルの方へ顔を向けた。とんかつやサラダ、茶碗などが綺麗に配置され、始めの二つには丁寧にもラップが掛けられていた。妹お手製の美味しいご飯。そして……。

「幸音？」

テーブルに突っ伏し寝ている幸音が視界に収まった。すーすーと安らかな寝息が聞こえてくる。余程疲れが溜まっているのだろう。そんな状態で夕食を作ってもらった上に帰りを待たせてしまった事に済まない気持ちが生まれる。いつか埋め合わせはするから、あと数日は待ってくれ。

廊下に再度出てクローゼットから毛布を一枚取り出すと、幸音の傍に行きそつと掛けてやる。ベージュの温かな色合いは見ているだけで暖かくなる。

「ん……お兄ちゃん？」

優しく、出来るだけゆっくり掛けたが、どうやら起こしてしまったらしい。幸音は眠け眼をこすりながら、ふにゅーっと背伸びした。一つ一つの行動が愛くるしいのは色眼鏡がかかっているからなのか。

「あふっ。お兄ちゃん、おかえり」

あくびをしつつ帰宅に対する対応をきちんとする幸音。髪が多少乱れ、呆としている顔を見ると、いつか離れ離れになる日が不安で

仕方がない。ちゃんと社会でやっていけるのだろうか？

「ただいま。ごめん、起こしちまったか？」

「ううん。そんな謝らなくていいから。あ、料理温め直すから席に着いてて」

「いいて。それくらい俺にやらせてくれ」

「だーめ。お兄ちゃんは疲れてるでしょ。安心して私に頼ってよ」
幸音は立ち上がると、ととととキッチンへ向かった。まだ起きてからあまり時が経っていないためか、足元が覚束おぼつかない。やっぱり不安である。

結局その後も幸音の世話になつてしまい、兄として誇らしくもあり、悲しくもあつた。別に嫌なわけではないけれど、ただ家事を任せつきりにしてしまつて以上あまり迷惑を掛けたくないのが本心だ。もつと友達の家へ遊びに行つたり、泊まりにいつたり、買い物したり。好きな異性と帰路を共にしたり、デートしたり。確実に学園生活を謳歌したい年頃だろう。無理はさせたくない。既に頼り切っている状況なので傲慢、図々しいと言われるかもしれないが、心の底からそう思っている。勿論最後の二つは出来れば回避したいが、思春期であるし十分いいことだと思ふ。だからバッドや竹刀を取り出したりはしない。勿論魔術も一切使用しない。

「何をあたふたしているの？」

「うわっ!？」

頭に浮かんだ、まだ会つてすらいない謎の男を俺が狂気に染まつた顔で蹴り飛ばしている光景を無理矢理外に追い出していると、幸音が突然話しかけてきた。いつの間にか温め直された料理が目の前に並べられている。全く気付かなかつた。こんなで明日大丈夫なのか？自分で自分が嫌になる。

「は、早いな」

「ん？ ボタン押すだよ？」

ポチッと押す動作を再現し、俺の言動に疑問を抱く。確かに難しいことでも何でもない。

「そうだな。うん、そうだ」

「今日はお兄ちゃん変だね」

「たまにはあるさ」

柳田辺りに聞かせたらいつもだろつと返してきそうだ。当然言ってきたら殴り飛ばしてやるが。

その後我が妹の手作りとんかつと味噌汁をじっくりと味わった。空腹に歪んでいた胃が幸福に満ち溢れるのに多くの時間は要らなかった。

第二十話 食事（後書き）

前回書き忘れていた文章を載せておきます。

義務、魂レベルでの強制。魂が答えを求めさせている。本当に何なんだ。何故取り返しのつかないことになるかと、魂は言うのだ。

尚も俺は考える。いや考えさせられた。恐れを抱かない理由。命を掛けた、得るものと失うものが明らかに釣り合わない賭博行為。あの人が生きていた頃はよく訓練という名の虐めを受けていたが、実戦での緊張がほぼ無くなるのはありえないことだろう。祈祷の術や治癒を扱えないこと、本来は習得することは無理と言われた集束系魔術が行使できたこと。治癒に特化した桜井家が他の魔術を行使する事は実質不可能だ。突然変異。様々なイレギュラーがこの身に発生しているのは明らかだ。深慮する。もしかしたら俺はこの家の生まれではないのか？ 養子として別の所から貰われたのか？ 解らない。判らない。一体俺は何者だ？

結局答えは見つからず、玄関を潜ることとなった。

求まらなかったことに後悔することはなかった。いや、後悔する機会なんて訪れなかった。何故なら俺は……。

今回はのほほん家族の話でした。なかなか戦闘シーンに進めず、すみません。

次回も妹、幸音との会話シーンです。戦闘は次々回くらいです。今思うと伏線かなり引きまくったなあ。

ちゃんと回収しきる予定ではありますが、少々不安ですね。怖い。

もし誤字脱字、日本語としておかしい文章、意見などがありました

ら、感想まで。
ではまた（・（ノシ

第二十一話 約束(前書き)

今回は今までよりも長めです。
覚悟して(?)読んでください。
では、どしどし。

第二十一話 約束

食器類の片付けを終えた後、俺は幸音と一緒に喋りを楽しんでいた。最近こうしてゆっくり顔を合わせる時間がなかったからか、それとも明日戦地に赴くからか、俺は無性に幸音と話をしたくなかった。

リビングのソファーに隣り合って座り、学校でのハプニング、周りで起きた珍しい出来事といった、他愛無い話をする。思えば小学生の時からずっと、幸音と何か話すときはここに座っていた。

両親が家を空けるようになり、一週間に一度しか帰って来ない時がしばしばあったあの頃、俺は妹と二人で過ごすことが非常に多かった。放課後の時間や休日はそれぞれ魔術の鍛錬、または授業があったので離れてはいたが、それ以外はずっと一緒だった。仲良く食事を摂り、仲良く話し、仲良く一緒に寝た、平穩そのものだった日々。全ての喜び、怒り、悲しみを共有してきた日々。言葉を交わした、心を交わしたあの時間があったからこそ、俺たちは仲良くやっていけているのかもしれない。例え、外部から様々な影響を与えられたとしても、きつと永遠にこの絆が切れることはない。

「どれで千雨ちゃんってば、そのまま頭からバケツの中に入ったんじゃないかってもう大変。しかも水が入ってたから、頭はぶつけるし、制服が濡れて下が透けちゃうしパニツクになっちゃって」

「ご愁傷様だな。本人災難、男子役得って感じだな」

「千雨ちゃんには心の底から同情するよ」

憐憫の色を帯びた目をし、幸音はぱちんと手を合わせた。ご愁傷様という意味合いだろう。本当にその千雨という子にとって災難に他ならない。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

話し始めて十数分が過ぎた頃、ふと会話が途切れる間があった。

理由もなく黙り込む俺たち。

時計の音がやけに大きく聞こえる。コチコチカチカチと機械的な音が部屋に響き渡る。時が止まっている。隣に座る幸音は顔をこちらに向けじつと俺を見据えていた。どうしたと訊く。

「最近よく十時辺りに帰ってくるから、何かあったのかなって思
って」

いつか、必ず聞いてくるだろうと考えてはいたが、俺は答えに窮した。まさかここまで直球で疑問をぶつけてくるとは思わなかったのだ。自然と視線が膝元まで下がる。固く組まれた自分の手がくつきりと紅白に分かれる。

内心の動揺が伝わったのか、幸音はやっぱりと眉を下げ心配そうな顔で覗き込んでくる。

「それは、私に言えないような事？」

その言葉は、過去の兄妹の姿からはあり得ない疑いだった。

「……………」

何も言えず黙りこくってしまった。

言えない。

言える訳がない。

俺が死ぬ可能性のある戦場へ行くのだと聞いたなら、幸音は必死の想いで止めようとするだろう。もし幸音がそのような事を言うようだったら俺は問答無用で引っ叩くだろう。

家族を危険に晒したくはない。誰も、誰かが傷つくところなんか見たくはない。その気持ちは同じはずだ。

……………ならば、自分勝手に、自己判断で戦いの場へ出ようとする俺は一体なんだ。家族に一言も告げずに出ようとしていた俺は。

愚か者なのだろう。

大馬鹿者なのだ。

それ以外の何でもない。

先ほどまで自分がしようとしていた行為は家族に対する裏切りだ。

信用していないと言っているようなものだ。俺が魔術を身につけ、何を守るうとしていたのか。大切な人を守るためではないのか？ 守る手段として選んだ魔術によって死ぬ。そうしたら俺は道化以外の何者でもない。

家族を信じる。幸音に全てを伝えるんだ。妹の目をしっかりと見る。今までの事、明日の事を伝えよう。適当な量の空気を肺に取り込み、第一声を発しようとした。

「言わなくてもいいよ？」

しかし、幸音がそれを遮った。

「隠してたつてことは、言いたくない事が言つてはいけない事なんだよね。どつちなのか、それとも両方なのか分からない。でも、私は隠したままでも全然大丈夫。無理して明かせなんて言わない。だつて強要したつて仕方がないもん」

幸音は目を伏せ、今まで見た事のない、大人びた、それでいて穏やかな面持ちで伝える。普段ののほほんとした、能天気な幸音とは懸け離れた気色。これまで共に過ごしてきた中で初めて見る幸音だった。

「心の底からそう思つてる。別に家族だからつて何もかも明かしたり、教えたりする必要はないんじゃないかな。強要するなんてもつての外。^{ほか}やつぱり行き過ぎはよくないし、逆に相手のこと全部知つてたらちよつと気持ち悪いかも」

結構難しいねと、幸音は困つた顔で笑い、幸音は先を続ける。

「でも、私の考えだけど、やつぱり頼つてほしいかな。幼い頃から一緒に暮らしてきたんだよ？ 遠慮なんてして欲しくない、遠慮なんていらぬ。些細な事でも、重大な事でも相談して欲しい。自分で抱えきれなくなつたら頼つて。悩みがあるならばしばし言って。迷惑だなんて思わない。むしろ嬉しいくらいだから」

ソファの前に置かれたガラス製の丸テーブルの上には、マグカップに入ったココアがある。既に冷め切つていて、湯気などどつくに消え去つていた。マグカップの中を覗くと自分の目がゆらゆらと

映っている。見た事もない混沌に満ちた瞳が真っ直ぐ俺を見据える。気がふれそうになり視線を外へ逸らした。

「ん、自分で何言ってるのか分からなくなってきた。えつと、とにかく、私が言いたい事はね」

視線と視線がぶつかる。彼女の熱意、不安が流れ込んでくる。

「少しは”家族”を頼って。私はお兄ちゃんに昔から頼ってきたから。病弱だった私に、いつも外の楽しい話を聞かせてくれたり、親身になって世話してくれたり。私は恩返ししたいの。大好きなお兄ちゃんに」

温かいものが心に広がっていくのを確かに感じた。ようやく気付く。俺の命は俺だけのものではないという事。蔑ろにしてはいけななんだ。そしてもう一つ気付いた事、幸音はもう子供じゃない。自分の考えをしっかりと持ち、自分の足でしっかりと歩けるまでに成長したんだ。

「……ありがとう。お前みたいな妹がいて、俺は誇りに思う」

「そんな、いきなり褒めてどうしたの？ 私は昔から最高の妹だつて自負してるよ？」

えっへんと胸を張る幸音。普段よりも可愛く且つ頼もしく見える我が妹に、俺は一つ約束をしようと考えた。小さな、けれど大切な約束。

「なあ、幸音」

「なに？」

「約束、してくれないか？」

「約束……どんな？」

俺の発言からやや間を空けて幸音が訊く。先程よりも不安の色が濃い気がするのは気のせいではないだろう。

「もし都合が良かったらさ、明後日この家で待つてくれないか。それで、俺の帰りを迎えてくれ」

その内容に首を傾げる。いつも通りじゃない？ と言外に訊いて

いた。

「別に無理にとは言わないけど」

なるべく強要と取られないようにそう付け足す。が、それが気に入らなかつたらしく幸音はわざとっぽくこほんと咳払いすると、ぴしつと指を突き出した。これまた可愛く且つ頼もしく感じる。

「別に無理にとは言わないけど、じゃないよ。我が家の長男らしく『明後日は家にいる！』ぐらいは言わないと」

「強要なんてもつての外って聞いた気がするけど」

「強要じゃないよ。兄としての威厳を持ってもらいたいだけ」

「そうなのか」

「あと、私の考えはしょっちゅう変わるから」

「駄目じゃん」

「安心して。いつでも頼ってほしいって想いは変わらないから」
花が咲いたような笑顔は、ついに俺の胸の内にある淀みを綺麗に消し去った。心に羽が生え、大空を舞っていくイメージが浮かび上がる。

俺は思う。

二週間前の自分は一体何を考えていたのか。桜井悠太、十六歳、高校生の三つだけで説明の足りる人物だと考えていた。違っただろう？ そうじゃないだろう？ 家族とか、友人とか、様々な人たちからの助けや支えがあつて、初めて自分が成り立つんだ。いわば、”今の自分”は様々な奇跡に巡り合つて存在しているんだ。他の人たちや自分の身を守るように？ 素晴らしく高貴な思考じゃないか。けれど、それは自分の身を犠牲にした上で成り立たせるものではない。何故守りたいと思う。平和が、平穏が好きだからだろうか？ いつまでも皆が笑顔でいられるなら、どんなに幸せな事か。そう考えたからだろう。ならそれらは何かを犠牲にした上で成り立たせるものなのか？ 否、そうして形成された平和は偽物でしかない。

おい、桜井悠太。自分を大切にしろよ。危険地帯にわざわざ突っ込んでおいて死ぬなよ。元よりこうなることは分かっていたなんて

ほざくなよ。お前が消えて泣くやつがいる事を忘れるな。お前の理念を叶える最低条件は一つ。生きる事だ。守れ。全てを守り抜け。さもなければ、必ず地獄に叩き落してやる。

「ねえ、お兄ちゃん」

「どうした」

「私からも一つ約束して」

「ああ、分かった」

「明々後日、一日デートして。必ず、拒否は不可です」

「拒否は出来ないのか」

「何があっても絶対だよ」

再度指を突きつけ、これは命令ですと言わんばかりの勢いで告げ
てきた。

「はあ、分かった。約束する」

「本当？」

「本当だ」

念に念を押す幸音に俺は淀みなく返答する。

「嘘つかない？」

「つかない」

「誓って？」

「誓って」

互いに笑い合う。緩やかな時間を楽しむ。

「絶対、だよ」

寂しげに呟いた幸音の聲がすっかりと俺の耳に届いた。大丈夫だ、幸音。約束はちゃんと守るから。だから、おかえりって笑顔で迎えてくれ。

第二十一話 約束（後書き）

やっとバトル準備終了しました。

やっとドタバタバトルコメディっぽくなります。

長かったです。ここまで来るのに約一年くらい掛かってしまいました。

もう初投稿から一年が経つのです。

光陰矢のごとしはこのことです。

一周年記念。

・・・やりたい。

めっさやりたい。

やらない手はない。

けれどネタがない。

というわけで。

現在必死になってネタを模索中です。

今のところグループ内での模擬戦について書こうと考えてます。

丁度8/17で一周年ですが、すみません、破ります。

一周年と数ヶ月記念になります。

番外話は書きあがり次第投稿するので少々お待ちを。

今回も何か意見・質問・指摘などがありましたら、感想フォームの方まで。

では（・・・）ノシ

新しい小説『夢と願いの学園恋歌』を載せました。そちらの方も読んで頂ければ光栄です

第二十二話 清算

廃工場は町外れの山下にあった。古く寂れたこの場所は何とも薄気味悪く、誰も近寄ろうとは考えさせないような外観をしている。外装は剥がれ落ち、所々に穴が開き、その脆弱さが際立っていた。入った瞬間崩れ落ち、下敷きになって命が絶たれる。そんな光景を想起させる。駄目だ。縁起の悪い事を考えない方がいい。本当になつたらどうする。

「……………どうしようもないか。」

「ここが吸血鬼のアジトね。随分といい趣味しているじゃない。正にイメージ通りって感じ」

優姫が左手のブレスレットを深く埋めながらそう言葉を漏らしたのを思い出す。確かにその発言には頷けるところがある。思わず笑ってしまつくらい”如何にも”な建物に、昨晚から続いていた緊張感が多少なり解けた。

最終会議を終え、各自潜入経路前に移り、着き次第行動開始する手筈だ。潜入、とはいっても正面突破に等しいのだが、そのころは気にしても仕方がないか。

今頃所長、ロン、美里さんは正門から突入しているに違いない。優姫、神谷ペアは正門を含めた計三つの出入り口の内北側、正門の左手に回っている。この二人は日常でも行動を共にする事が多いらしく、戦闘訓練においても、その相性の良さが伺えた。互いの事を良く理解し、ペアとして申し分のない二人だ。

俺と美月は残る一つ、南側の門へと向かっている。馬鹿正直に門から入るのはどうかと思つたが、所長曰く「金網や壁を登る、または破ろうとするとあげつない術式、例えば全身串刺しとか洒落たものとか発動する」らしい。吸血鬼だから串刺しね。全く笑えない。

美月は首から下げられた件のネックレスを強く握り、ただただ真っ直ぐ門へと向かう。外側にある雑草の生い茂る道には魔術的細工、

物理的細工は何一つされていない事は確認済みだ。新たに仕掛けられたとしても一瞬でバレるだろう。

……美月に。

一応俺も罫外し（アンチトラップ）の魔術を行使できなくはないが、適性があまりよろしくなく、半径五メートルで大量の魔力を消費してしまったため、はっきり言って利点がないのだ。なのでこういった魔術の大半に関しては美月に頼るしかない。

魔術を行使する上で大きなウエイトを占める三つの要素がある。

一つは構成。脳内の想像を基にして組み上げるか、それとも予め構成式、術式を組み上げておくかの二つに分かれる。これの完成度によって効果自体も変化する場合もある。前者はその場で構築できるのであれば如何なる魔術でも運用できる。代わりに大規模な魔術や複雑すぎる魔術を構成することがかなり困難だ。後者は時間こそ掛かるもののより高度な、より規模の大きい魔術行使を可能とする。二つ目は魔力。実際に使う際に、やはり構成式に沿って魔術を行使するのに魔力は不可欠。魔力は個人が生成するオド、大気や自然界に存在するマナがあり、基本的にマナは一回きりの大規模な原動力、オドは常に生成する事の可能な小規模な原動力である。

そして三つ目は適正だ。その人自身が持つ魔術の才能がやはり関係してくる。俺の場合、祈祷や治癒といった回復や補助系統の魔術がからつきし駄目で、逆に収束や罫設置、障壁といった攻撃性魔術、雷撃や氷結といった元素魔術、記憶消去や精神高揚といった心性魔術の適正が高い。それ故桜井家からは邪魔者扱いされているわけだが。

このように俺は非平和的なものしか扱えないので、戦闘以外ではあまり使い物にならないのだ。正直泣けてくる。

無言のまま時が進む。未だに蝉の声が鼓膜を刺激し、湿度のが高いが比較的涼しい外気が身を包み込む。もうそろそろ秋の訪れを感じ

させるようになるだろう。今回の事件が収まったらグループ全員で紅葉を見に行くのも悪くないかもしれない。

隣で黙々と歩く美月を盗み見る。美月は間近に戦闘が迫っているためか、先程から一言も発していない。顔は強張り、呼吸が心なしか速いような気がした。余程緊張しているのだろう。このまま戦闘に入っても間違いなく冷静な判断は出来まい。俺は美月をリラックスさせるため適当な話題を振ろうとし、

「……………」

やめた。美月は緊張すると共に集中している。緊張し過ぎず、かといって弛緩し過ぎない適度な心理状態を作っているのだ。それを掻き乱す行為は憚られる。いや、そもそもリラックスさせようという考え自体間違えなのかもしれない。先日、俺は美月の考えを、行動理念を否定した。復讐心、仇討ち、どちらも人として当然のように持ち合わせているもの。俺は美月の気持ちをも十分に理解せず、ただ美月の手を汚して欲しくないという理由で身勝手な願望を押し付けてしまった。昨日に引き続き自分の愚かさ加減にげんなりしてくる。そのような発言を考えなしにし、果たしてパートナーに相応しいのか。

もう発言は取り消せない。これは語弊があるか。そもそも俺の考えが間違っているとは思っていないのだから。

ならば、俺に言えることは何もないのか？ 違う。あんな発言をした後でも、言える言葉が。

「美月」

「……………何？」

しっかりと前を見据え、顔を動かすことなく美月は反応した。聞いている事を確認すると俺は一言告げた。

「一緒に倒そう。吸血鬼を」

美月は横目で俺を一瞥するとすぐにまた前方へ視線を固定させる。
「言うまでもないよ」

魔力石を幾らか取り出し、美月は右手にある腕輪

サファイア

が施された黒い革のベルトへ魔力を移す。途端に青き宝石が僅かに輝きだした。胸元には件のネックレス、服装は漆黒のワンピース。彼女の持ち得る武装、完全装備。美月は、本気だ。

「さあ、行こう。過去の清算はここで果たす」

吸血鬼のこととなると強烈且つ冷静な判断、行動をする美月。憎悪と冷酷。炎と氷。上手く共存させ、それを原動力とする彼女は、自らの全てを投入するとばかりに身体を魔力で満ち溢れさせた。

彼女の中では、既にこの場所が吸血鬼の墓場だと断定されているのだろう。確かに、ここは彼の最期には相応しい場所なのかもしれない。何故ならここほど静かで安らかな終りを遂げられる場所はない。草原以外にここしかないだろうから。

第二十二話 清算（後書き）

次回戦闘開始です。

今までは短く区切っていましたが、次からは結構長めになりそうです。

なんせ戦闘ですから。

色々伏線回収をしますから。

学園恋歌と平行して書いているのですが、最近ちょっと辛いですね。

『魔法使いの戯言』第一部、早いところ書き終わらないと（汗）

もし意見、指摘、感想などがありましたら感想欄の方まで、宜しく
お願いします。

では（・・）ノシ

第二十三話 束縛

寒い。

廃工場内に足を踏み込んで初めに感じたのは、熱が奪われていくような奇妙な感覚だった。夏特有の蒸し暑さを伴った空気は鳴りを潜め、代わりに見も凍りつくような冷たい空気がまるで誇張するかのようには漂っている。精神的なものから来る錯覚なのか、実際に大気がそのような状態であるかは分からない。どちらにせよ、寒いという事実には変わらないのだ。

無駄な思考。逃避思考。駄目だ。今は目先の事だけに集中しろ。ここから先、余計な思考は単なる妨げにしかならないのだ。

「この辺りにはヤツはいなさそうだな」

「うん。所長で言うところの『吐き気のする魔力』が貯蓄されているみたいだけど」

「どれくらい？」

「一生研究で使えそうなくらいだね。よく隠し通せたものよ。隠蔽に苦労したでしょうに」

美月は嘲笑と憎悪が入り混じった複雑な声でそう言葉を返してきた。確かに、グループ本部から遠方にあるとはいえ管理範囲内には入っているのだ。生半可な隠蔽ではないと分かる。

「それにここまでやるくらいだから、でかい事起こす気にいると思う。あいつの解析魔術が絡んでくるかもね。何かの魔術の研究でもしているんだと思う」

「アイツが何をしようとしているのか解明しないとな」

「でもそれは後回しだよ。今は違う事を考えなきゃ」

「倒す事だけを考える？」

「そうだね。あいつを倒す。絶対にやってみせる。だから目の前に立ち塞がる物は片っ端から壊していかないと。人だったら生きている事を後悔させなきゃ。……そう思いませんか？ こそ

こそ陰に隠れている方」

前方にヤツとは違う魔力を持つ者がおり、幻影魔術で身を潜めている事を、侵入する前に美月が察知し、アイコンタクトで教えてくれた。

風が吹く。砂が舞い上げ、冷たさはそのままに、新たに異常性を孕んだ風が目の前にある広場の中心に集まる。見えない何者かが動くのを感じる。

「……………」

霧が晴れるように全貌が顕になる。二メートルを越える巨体を持つ黒コートの男。その風貌、見間違う事などない。しかし。

「吸血鬼……………」

隣で呟く美月の声には戸惑いの色が濃く出ていた。俺自身も男に言いようのない違和感を覚えていた。

果たして眼前にいる男は本当に吸血鬼なのだろうか。外見は確かにヤツそのものだが、あの身に纏う不穏、不吉さは一切ない。目は不気味な赤色をしておらず、身を雁字搦めにさせるような殺気も発していないかった。

男は一歩近づく。

「吸血鬼、か。お前らがそう認知しているのなら、そうなのだろうな」

「訊ねます。あなたは吸血鬼ですか？」

「つまらない質問はするな。あの野郎に怪しい術を掛けられてから、ずっと気分が悪いんだ。血を採れ、血を採れと喧しい。これ以上気分を害させないでくれ」

男は認識障害の術を掛けているのか、俺は男の素顔を全く見る事が出来ないでいた。恐らく声も変化しているのだろう。その手の魔術を解く術は知らないため、男の発言や挙動でしか情報を得るしかない。

「しかし」

「しつこい。誰だろうと関係ないだろ。俺はお前たちを阻むため

息切れ切れに、男は怨嗟の声を漏らし続ける。そして

「そうだ。風流美月、桜井悠太。俺と共にルイス・クラインを殺さないか？」

そんな予想だにしなかった提案に俺は呆然とする。

「お前らはアイツを殺しに来たんだろ？ 目的は一緒だ。利害も一致しているはずだが、どうだ？」

息を呑む音。手を組まないか、共にアイツを始末しよう。俺はその声掛けに戸惑いを隠せないでいた。見聞きした限り嘘をついている様子はない。何があったかは知らないが、アイツに対する憎悪が心の底から沸き上がったものだという事は確かだ。

「断るわ」

ぴしりと美月が言い放つ。場の空気が凍る。

「だって信用できるわけないでしょう？ いきなり現れたと思ったら叫びだして。その次には協力しろだなんて、怪しいどころか、むしろ恐怖ね」

遠慮なしの美月の発言に、俺は血の気がサツと引くのを感じた。メンツールのような涼しさ、ねとつとした嫌な汗が共存するこの感覚はよくない事の前触れだ。冷や汗が止まらない。疑うのは無理もないが、相手をわざわざ刺激しなくてもいいではないか。まさか、相手の頭に血を上らせて、判断を狂わせる目的なのか？ 何にする得策ではない。

「こちらに共闘の意思はありません。あなたを捕らえて全て吐いて貰います」

美月は右手を前に突き出し、左手を右肘より少し前に添える。何度も見た魔術行使の姿勢、右手に集まっていく魔力は今後の事も考えてか普段よりは少ない。しかし相手の機動力を奪う魔術に使用する魔力量だった。恐らく行使する魔術は束縛、しかも上位に位置する「罪人の足枷」キルティ・チェーンだろう。元は魔術師としての規則を破った法外者に対しての拷問に使用された魔術らしく、あまり経歴はよくないが、束縛までの早さ、継続時間共に優秀であるため、使い勝手がよく、

愛用者は多数いると聞く。男は美月の体内に魔力の流れを察知したのか、やれやれといった様子で。

「出来るだけ平和的に解決したかったが、どうやら無理のようだ」
何かを取り出した。

一切の装飾を取り払った一振りの短剣が男の手に握られていた。それは俺が見てきた中で最も質素で、無機質で、それ故不気味であった。直感的にあれが良くない物だと、暴力的且つ効率的に解決させるための物だと理解する。

「美月。あの男と吸血鬼を立て続けに相手するだけの魔力はあるか？」

「パートナーを見くびっちゃいけないよ。夜通し使い続けられる量はあるよ。悠太君は？」

「前もって組んである術式をありったけ持ってきた。盾の強度は二倍近く、身体強化システムも準備しておいたから、そう簡単にはくたばらないさ」

現在の俺の装備は魔力の詰まった石『魔力石』が五つ、身体に書いた皮膚及び内臓、骨の強度増加の術式、魔術の既成術式、そして幸音の作った御守りだ。

魔力石は美月と同様に美里の計らいで腕輪に埋め込んで貰った。必ず役に立つからと授けてくれたのだ。

術式は一週間準備して作り上げた自信のあるもの。

御守りはもしものためにと以前幸音から譲り受けた、ダンブカーに撥ねられても骨折程度に軽減してくれるという治癒及び痛覚制限、簡易結界の術式が組み込まれている。

これらを上手く運用し、勝利、いや生き延びるのだ。

目の前に立ち塞がる男からは未だ殺気が見られない。本当に戦うべきなのかやはり戸惑う。けれど、やらねばならぬのだろう。

「二人とも行くぞ。どれ程の実力なのか、この目で見届けてやる」
「っ、<集束弾 待機解除、第三軌道、発射>」

男は短剣を腰の右に構え、一気にこちらへ詰め寄ってきた。咄嗟

に美月は集束弾を放ち、その進行を阻もうと打ち据える。十六の弾が相手を攪乱させようと不規則に動き回る。元々術式に、あるパターンを予め記しておきその通りに動かしているため、ある意味規則的と言える。軌道が決定しているので途中変更はこの術式の場合不可なので、見破られればそこまでだが、初見の相手にとっては回避が困難であることに変わりはない。見る前に見破ることは出来ない。予測不可能な弾幕に対し男が取りうる選択肢は一つ、回避のみだ。

「くっ！」

時々をたたらを踏んでいる事から、男が予想以上に苦戦しているという主観的とも客観的とも言えない情報を得られた。弾丸の内七つが急に動きを停止し、主を守らんと美月の近くを周遊しだした。真横から見ると直線に、真上から見ると円状に動いている。相手の魔術を打ち消すよりも牽制の意味合いが強い七つの弾丸、依然複雑に動き回る九つの弾丸は時折地面を穿ちつつ相手を攻め続ける。

「<Load 「Trap」 five set, stand by, ready>」

このまま見ているわけにはいかず、俺は幾らか用意した術式の中から罫の魔術を選択する。五箇所にそれらを設置し、過剰供給しないよう細かく調節する。優姫が以前使用していたのを見て、自分なりに組み上げた魔術だ。最初は構成できるか不安だったが、案外すんなり基礎構成が上手くいった。そこからの付加に手間取ったが、なんとか一つだけ成功した。

「<周遊速度 加速、第三軌道 加速>」

呪文を唱え、相手を更に窮地に追い込もうと美月は魔力を注ぐ。これは俺みたいな普通のヤツには出来ない。美月の異常な魔力量と精密な行使があつてこそ成せる技だ。短期決戦に持ち込む気なのだろう。縛り付けてアイツの居場所を吐かせる手段を探るのか。そして。

「<待機解除、『罪人の戒め』、彼の者を捕らえよ>」

縛りを解き放った。不気味に白銀に輝く魔の鎖は蛇のようにうね

うねと動きながら、その矛先を男に合わせている。男はいずれ捕らえられると考えたのか、短剣に魔力を籠めると再びこちらに向かつて駆け出した。恐らく鎖を断ち切る気であるのだろう。弾丸を短剣で退け、幾らか食らいつつも男は走り、距離は着実に縮まっていく。五メートル弱。あともう少しだ。

もう少しで終わる。

男の体が傾く。急激に体勢を崩し、そのまま地面に倒れこむ。そして四肢に鉄の鎖が巻きつき彼の動きを妨げた。

俺が仕掛けた罠、名称は『縛鎖』。何の捻りもない名だが、効果はなかなか恐ろしい。見ての通り、設置した範囲に相手が踏み込んだ瞬間に発動するスイッチ式で、鉄の色合いをした魔術で編み上げた鎖で確実に捕らえる。

別に色は関係ないのではと言われれば確かにその通りなのだが、魔術を行使する上ではイメージというのは結構重要だ。特に脳内の想像を元に魔術を行使する方法にとっては、前もって構成しておく方法とは意味そのものすら違う。

鎖は行使者が魔力を注ぎ込んだ分だけ強度が増し、やろうと思えば超合金並みにまで上げられる。つまりレベルを調節できると言う事だ。

今回俺が設定した強度は相手を十秒くらい足止めできるくらい。実際は五秒しか足止め出来なかったが、それでいい。

美月の『罪人の戒め』が男を束縛する。ジャラジャラと音を立て、まるで質量を持っているかのように男に重く押し掛かる。

「<全弾、一撃体 追撃>」

そう、五秒あれば十分だ。

男が大きく目を見張る。認識阻害を掛けているためはつきりとした表情は窺えない。しかし、人の動揺は例え魔術による隠蔽が施されていたとしても隠し切れるものではない。

十六の弾丸が男に目掛けて飛び込んでいく。全て受けたのであれば失神くらいでは済まされないと思うが、美月のことだ、死に至ら

せはしまい。

弾は一点に集まり、おぞましいほどの閃光が辺りを照らし、

「そこで寝てなさい」

鼓膜を突き破るような爆裂音が空間を裂いた。

目の前に立ち塞がる物は片っ端から壊し、人だったら生きている

事を後悔させる。ではどちらでもない何かは？ 言うまでもない。

両方だ。

第二十三話 束縛（後書き）

今日発売のSAO8。

近くの書店に売っていなかった。

代わりに『緋弾のアリア8』と『レイヤード・サマー』を買った。

レイヤード・サマーを現在読み進めている。

凄く期待して読んでます。

近況報告はここまでにして、

誤字脱字・意見・指摘などがありましたら感想欄の方までお願いします。

では（・）（ノシ

第二十四話 業火（前書き）

予約投稿です。

第二十四話 業火

「優姫、この状況をお前はとう見る」

「考えたくもないほど最悪よ。相性が悪すぎる。こういつやつらと戦わせるなら美月達の方が得意だからね」

「ケツ。風流はいいが、桜井はいけ好かないぜ。確かに力押しなら向こうが上だと思うが」

「あら。パワーファイターのあんたが賞賛するなんて、あの二人が羨ましいわ」

「軽口を叩けるのもあと何分までか。とりあえずこの異形共を片付けねえとな」

「そうね。相手は間違いなく召喚系魔術使い。しかも結構な手練よ」

「つたく、よくも百体も召喚できるよな。ヴォッコヴォッコにしやすいけどよ」

「さすが宗一。惚れたわ」

「……すまねえな。俺には心に決めた人がいるんだ」

「告白したわけでもないのに振るなんて酷いわね。自棄酒しようかしら」

「自棄酒の前に肴を用意しなきゃな。つまみがないと味気ない」

「味気のある自棄酒って聞いたことないんだけど。まあ一理あるわね。さっさと調理してホルマリン漬けにしなきゃ」

「俺は八つ当たりするか」

「さあ、パーティーの始まり始まり。前奏曲はゾンビたちの叫び声でお届けします、ってね」

遠方で凄まじい爆裂音が響いてくる。それとほぼ同じタイミングで、三十の異形が塵と化した。優姫の手によって。業火という懲罰の炎を以って。

第二十四話 業火（後書き）

かなり短くなりすみませんでした。

十二月までPCに触れられないので、感想、意見に対して返すことが難しい状況なので、もしかしたら返答は十二月下旬になるかもしれません。

また更新ペースもさらに遅くなります。

ご迷惑をおかけし、すみません。

第二十五話 死刑（前書き）

予約投稿です。

第二十五話 死刑

「あの子達は随分と派手に飛ばしているね。魔力の尽きは……心配ないか」

工場の一角に神楽月、結城、ロンがいた。各々自分の獲物を持ち、展開し、万全の態勢を整えていた。風流が右手首を押さえ言う。

「それにしても予想外でしたね。まさか吸血鬼が三人もいるなんて」

「……」

ロンが首肯する。

「不幸中の幸いとしては、我々の割り当てられた場所にいるモノが親玉だつて事だ。また会つたなルイス」

その名を呼ばれる事を待っていたとばかりに、暗闇から一人の男が、コツコツと音を立て歩いてくる。不吉であり不穩そのものである魔術師。原始を知る為にその一生を費やす決意を固めた、解析に關しては魔法使い一歩手前にまで上り詰めている。かるての同僚と殺し合いをする羽目になろうとは。本当、人生何が起きるか分からない。

「こんばんは。出来れば君の顔など拝みたくはなかったのだが、どうやら神は運命をいうやつが好みらしい」

「魔術師たる者が軽々しく神なんて言つてはいけないぞ、ルイス。精霊でもやつてきたらどうする」

「君も軽々しく精霊と口走らない方がいいのではないかね。特に君の魔術は異常過ぎるのだ。元来、それこそ天上の者達が持つべき力を人間である君が所有している事が矛盾であり傲慢なのだ。彼女達に消されたくなければ不用意な発言は慎むべきではないかね」

「ふむ。つまり君は私を蔑ろにしているのか？」

「侮蔑の意味は籠めていない。私は自殺行為を働く真似はしないのでな」

「はっ、笑わせるな。我々の街に手を掛けた時点で君の処刑は決定している」

五つの魔導書の内二つを展開する。情報量は十分。後は相手の脳を焼けばいい話だ。

「もう戦おうと言うのか？ 待ってくれよ。私は野蛮人と低俗な争いをしている場合ではないのだ。いや、元々君達は低俗だからわざわざ言うまでもないか」

「喧嘩を売るのはよしてくれ。憐れで堪らない」

「ならやめよう。私は計画の邪魔をする身内にちよつとばかり灸を据えてやらなければならぬのでな」

「身内、な。あのゾンビ狂いか？」

ルイスはにやりと卑しい笑みを浮かべるとカカカカと壊れた人形のような笑い声を立てた。

「君がよく知る人物だよ。まあその麗しき女性の方がよくご存知でしょうがね」

急に話を振られた美里は、しかし、まるで最初からこのタイミングで話しかけられる事を知っていたかのように、慌てもせず、はっきりと、冷たさを鋭さを伴った声で返答した。

「ええ、仰るとおりです。穢れた手品師さん。生前は彼とは交流を深めておりました、互いの理念を伝え、同意し、より完成度の高いものへと昇華しました」

「ほお。どのような理念かね？」

興味を持ったというより揶揄の材料を見つけたという反応だ。あからさまに馬鹿にした態度。それに気にも留めず、美里もまた嘲弄するような物言いで放つ。

「沢山あるのですが、その内の一つ、『やられたらやり返せ。仇を討つべし』。あなたを仇と見るのはいささか屈辱ですが、仕方がないですね。腹いせに今日、明日はたつぷりと拷責してさしあげましょう」

「はっ。たかだか一人の男の為にそこまでするのかい？ 律儀な

人だね、君は」

美里の言葉にルイスは顔を顰めつつも嫌味を籠めて応える。

「……一人じゃない」

「む？」

「一人じゃありません……」

「はて。君の知る人物で消してしまったのはイタルしかいなかったと思うが。失敬、他にも殺ってしまったか」

「覚えてないですか？ あなたは七回も殺したのよ」

次の瞬間、凄まじい轟音と共に近くに建っていた工場の一角、三階建ての古びた本部だったと思わしき建物が崩れ落ちた。正しくは不可視の一撃により柱が折られた事による崩壊で、規模そのものはそれ程大きくはなく、破片がこちらに飛んでくることはなかった。しかしその正確無比な射撃、魔力の込める量、射撃速度は彼の技術の高さが伺える。

「戯言になんか聞く耳も持たん。俺達がやったのは全部で三つ。七つも殺ってはいない」

「はあ。別に覚えている事になんて期待してないわ。でも残念ね。生かしておけない。私の復讐はまだ終わってない。あなた達を八つ裂きにするまでは幾度でも戦う　！」

美里は右手を相手に向け、伸ばした右腕の中間地点、丁度肘の部分に左手を添える。それを一瞥し、ルイスは神楽月に一つ問う。

「なあ神楽月よ。一つ訊ねてもいいかね？」

「……ああ、いいぞ」

「私の処刑は決定していると言ったね。それはどのような刑か、聞いてもいいかい？」

「はっ、言うまでもない」

神楽月は分かりきった質問をぶつけるルイスに心の底から嘲る。

美里の右人差し指から蒼い光が放たれる。綺麗な青ではなく、くすんだ青。直径十五センチメートルの蒼い魔弾が複雑な軌道を描きながらルイスの後方へと消えていった。

「死刑だよ」

聞くのは野暮だったかとルイスは自らの行動に苦笑する。背に障壁を展開し、来るであろう衝撃に備える。そして。

「<メント・モリ>」

無限とも思える量の蒼い針がルイスに襲い掛かる。針は障壁に阻まれとも対象を突き刺そうと進み、弾かれたものは再度標的に振りかかった。

「力の源は『復讐心』」

美里がルイスに向かって歩く。周辺には五十一の蒼き弾丸。一つ一つに籠められた魔力は地を抉るくらい難なくこなせる程度。怒りに燃えた瞳で美里は笑う。彼の言葉を思い出す。ごめんなさい。無理だよ。私の魔術はこういう方法でしか行使できない。

こういう方法でしか私は報われない。

第二十六話 短剣

砂埃が巻き起こる。私が放った計七十七の弾丸が男へと向かっていった。三割は地面を穿ち、残りの七割は確実に相手の肉体を抉っただろう。悠太が足止めしてくれた事も起因し、まず直撃は免れない。相手へ多大なる損傷を与えたのは確実だ。さあ、砂埃よ。早く晴れおくれ。敵の結末を教えておくれ。

「っ！」

不意にとてつもなく不吉な予感が寒気として私の直感に働きかける。背筋に嫌な刺激が走る。良からぬモノが覚醒した合図、気持ち悪いくらい綺麗且つ必要十分な術式が起動した痕跡。それが直感を確信に変える唯一、そして絶対の証拠。

咄嗟に障壁を展開し守りを固める。悠太は既に気づいていたのか青く透き通った円盾で身を守っていた。

十本の短剣が迫り来る。その内の二本が障壁に突き刺さり、砕け散った。

咄嗟に真横へ大きく跳躍し残り八本による攻撃を避け切った。柔道の受身の要領で起き上がり態勢を立て直す。悠太の方へは攻撃を仕掛けなかったようだ。

男がゆらりと立ち上がる。視界を遮るものは一切存在せず、極めて明瞭で男の状態を計るには最良であると言えた。男の周囲に散らばる同形状の短剣短剣短剣。目測で三十弱はある。敵には見える範囲ではあるが傷一つ見当たらない。羽織っているコートの端すら切れていないのではなからうか。

「なん、で」

しかし、そんな事実はある事実に比べれば些細な事でしかなかった。彼の右手に握られている一振りの短剣、先程の技を見る限り、魔力を通す事で同一の形状のものを複製する創造系統の術式を用いているのは明白だった。あの男の場合、最小の魔力で最多数の短剣

を作り出せるように綿密に式を組んでいるのだろ。その術式を使い、私の弾丸を全て切り落とす芸当を持つ人物を私は一人だけ知っている。

「さすがだ。まさかいきなりしてやられるとは思っても見なかったぞ」

もし私の予想が当たっているのなら。

「ここからは少しばかり本気を出させて貰うぞ」

私たちは彼には絶対に勝てない。

術式解析

該当一件、再現可能か調べる

術式構成、完全解析完了

使用魔力、問題無し

素質、問題無し

一件、成功率百パーセント

発動中、発動後の状態異常無し

「魔力運用練成型多重短剣」使用可

情報保持

詠唱指定 < Load 「thousand daggers」 >

登録完了

全工程終了

魔力を編み上げ収束弾を作り出し相手へと打ち飛ばしつつ悠太とは反対方向へ走る。悠太は魔力を右手に集め、直径五センチの弾を発射した。「スターライト」だ。相手が怯んだ隙に一瞬で相手を沈める魔術を打ち込もう。大丈夫、あの人なら死ぬことはない。広域に弾丸を生成すると再び相手へ向ける。悠太の魔術が効果を発揮する。明らかに相手の動きが止まった。相手を中心に五メートルの範囲に容赦なく致死性を伴った雨を降らせる。短剣が光る。複製された短剣が自動的に弾丸を切っていく、切断された収束弾が次々に霧

散した。

「悠太。相手の足止めを任せる」

「了解。 < Load 「daggers」 Stand by , ready Start >」

悠太の頭上にナイフが幾つか現れ、目標を斬りつけんと直線的ではあるが非常に速い速度で放たれる。

？ あんな魔術以前使っていたっけ。

小さな疑問が浮かんだが戦闘に支障が出るとすぐに振り払う。今は相手を無力化させないと。もし吸血に思考を乗っ取られていたら取り返しのつかない事になる。足を止めてしつかりと目標に焦点を定める。

「 < 展開、千棘の槍、ガイ・ヴォルグ対象設定完了 > …… 穿て！」

蒼い槍が出現した。重ねて弾幕を敷き、総出撃の合図を送る。再度振られた致死の雨。分かりきつてはいたが悉く切り落とされていく。男の顔には余裕という文字が張り付いている。ただ油断という文字は何処にも見当たらなかった。

私の槍が、男が弾丸を捌く最中流星の如く空気を突き破っていく。勿論、相手がこれを察知しない筈がない。短剣が一つを除いた全ての私の魔術を払いきった。男は最後の一つも同じ霧散する運命に帰させようと一つの剣先を槍に向かって突き出した。

槍と剣がぶつかり合う。均衡は一秒しか保たれなかった。

男が地を転がりながらも懸命にその場から一センチでも離れようと退避する。彼自身の手によってばら撒かれた短剣が彼の肉体を削っていくのが視覚で捕らえたが、相手に傷を負わせられた喜びよりも、あと一歩だった事に対する口惜しさで胸中を満たされた。

槍が衝撃を感知した僅か一秒五〇後、男が回避を選択し実行した。〇秒八二後、長細い蒼き棘、数にして百近くが開花するかの如く生えてきた。槍だったものは未だに速度を速めながら工場の一角へと消えていった。体に幾つか新たに身につけてしまった血塗られた装飾に男は顔を顰めつつもその巨体を起こす。魔力の供給を絶ったの

か、装飾品が霧が晴れるように消える。

「見事だよ。美月、俺としては合格とでも言い渡して山奥に籠りたい思いだ。済まないな。この暗示、どうも解けなくてな。正直自我を保っているだけできつかったりする」

「きついとは言っても、随分遊んだではありませんか。そもそもあなたが辛いなんて泣き言を発する事自体、私にとって驚きです」

「……その様子、もう気づいたのか」

「数年間ご無沙汰しておいて謝罪も無しだなんて、淑女に失礼ではないですか？ 師匠」

「その言い方。神楽月と結城にそっくりだ。影響を受けたというか、汚染されたというか」

「あなたも人の事は言えないでしょう。言わなくても分かるとは思いますが、まだあなたが正気であるか否か疑っているんですよ？」

「教育がしつかりなされているようで何よりだ」

「さて、歓談もここまでにしておきましょうか。この雰囲気の中、相方を一人で置いておくのは少々酷なので」

男は苦笑すると、いたずらげにされた幼い子供のような表情で先程の自分の所業を話した。

「実はな、さっきその坊主が短剣を撃って来ただろ？」

「ええ」

「つい本気で対抗してな、あいつの頭のと真ん中に弾丸を飛ばして」

「そのまま気絶してしまつたと」

呆れた態を装って私は大きく溜め息を吐いた。

「仕方のない人ですね」

「性懲りもないんでな。そこで一つ提案したいことがあるんだけど」

少し間を空けて、男 至は言った。

「改めて訊ねる。俺と手を組んでルイスを討伐しないか」

一陣の風が頬を撫でた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2555n/>

魔法使いの戯言

2011年11月13日11時40分発行